例　言

1．本書は、埼玉県入間郡大井町内に所在する遺跡群の2000年度の発掘調査報告書である。
2．発掘調査および整理作業は、国庫(3,900,000円)、県費(1,950,000円)の補助金の交付を受け、平成12年4月3日から平成13年3月31日まで実施した。
3．調査組織

調査主体者	大井町教育委員会	文化財保護係長	坪田幹男
担当課	生涯学習課文化財保護係	文化財保護係・庶務	高橋偕子
教育長	遠藤正明	文化財保護係・発掘調査担当者	高崎直成・鍋島直久
教育次長	池本敏雄	大井町臨時職員・発掘調査担当者	土本医
生涯学習課長	金子忠弘		

4．本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。
執筆：縄文土器　今井堯、本文･遺構　高崎直成　土器拓影：石垣ゆき子、丹治つや子、福島雅子、山口妙子
土器・陶磁器実測：青山奈保美、石垣ゆき子、伊藤弘一、丹治つや子、福島雅子、山口妙子　　石器実測：青山奈保美
土器復元：中田藤子　　トレース：青山奈保美、小林登喜江、須藤さち子、表作成：植田勢津子
図版作成：青山奈保美、植田勢津子、須藤さち子、高橋けい子、丹治つや子
遺構写真：高崎直成・土本医・坪田幹男・鍋島直久　　遺物写真：高崎直成
また、整理作業のなかで日本考古学協会員の今井堯氏の援助と協力を得た。
5．各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏・機関より御指導・ご協力を賜った。(敬称略)
会田明、浅野晴樹、穴澤義功、天ヶ嶋岳、荒井幹夫、市丸靖子、上田寛、内田賢司、岡田賢治、加藤秀之、梶原勝、梶原喜世子、神木繁嘉、國見徹、隈本健介、小出輝雄、駒井和久、桜井信枝、笹森健一、佐藤啓子、島田一郎、高橋京子、田中信、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、水村孝行、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治
埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、東久保土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会、(有)文化財COM
6．発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。特に、本村遺跡第86地点および東台遺跡第33地点の調査にあたっては富士見市教育委員会ならびに同市作業員の方々に多大な協力を頂いた。記して厚く感謝の意を表したい。
〈発掘調査参加者〉(敬称略)
新井和枝、飯塚泰子、井上晴江、海老原サナエ、大曽根キク子、笠原英子、加藤智香子、金子君子、金丸文男、小林こずい、酒井昭、佐久間ひろ子、篠崎忠三、鈴木英子、鈴木エミ子、関田成美、高貝しず子、戸澤竹二、中嶋末子、野岡由紀子、林きぬ子、比嘉洋子、増沢勝実、三村美代子、村端和樹、若尾久美子、若林紀美代
(富士見市教育委員会)飯田久子、泉邦子、上田寛、黒田千恵子、佐々木真理子、清水七枝、関根輝子、高野ナミ、戸田美根子、中路子、名久井よし江、羽田美代子、深野サイ子、吉田信江、若槻たか、渡辺日出男
〈整理作業参加者〉(敬称略)
青山奈保美、石垣ゆき子、石原聡、伊藤弘一、植田勢津子、小林登喜江、須藤さち子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、福島雅子、山口妙子

凡　例

1．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
(1) 縮尺は原則として
遺構配置図　1：300　遺構平面図・遺物出土状況図　1：60、1：30　炉などの詳細図　1：30
土器実測図　1：3、1：4　土器拓影図　1：3　石器実測図　1：3、2：3　銭　1：1
(2) 遺構断面図の水糸高は海抜高を示す。明記していないのは同図版中の前遺構の海抜高に同じ。
(3) 遺構図におけるscreen-toneの指示、遺物出土状況のドットの指示。
撹乱　地山(ローム)　焼土
土器 ●　石器 ★　黒曜石・チャート ▲　礫 ○
(4) 土器断面図は、「網目」が繊維含有、●が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。
(5) 土器・陶磁器実測図の中心線が破線の場合は、180度回転させて復元実測したことを示す。
2．住居跡名は、遺跡内の通し番号にしている。
3．本報告にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して大井町教育委員会生涯学習課に保管してある。

第２表　2000年度埋蔵文化財調査一覧表

No.	遺跡・地点名	申　請　地	調査面積(m²)	開発面積(m²)	原　因	試掘期間 本調査期間	調査措置
1	鶴ケ岡遺跡第2地点	鶴ケ岡3-16-1・14	320	1,327	共同住宅	12. 4. 6～12. 5.16	試掘
2	亀居遺跡第53地点	鶴ケ岡2-28-1	628	1,422	飲食店	12.10.30～13. 1.18	試掘
3	江川南遺跡第13地点	東久保3街区21画地	55	123	個人住宅	12. 6. 7 12. 6. 8～12. 6.21	教育委員会で本調査
4	江川南遺跡第14地点	東久保1街区1画地	237	461	店舗	12. 7. 5～12. 7.10 12. 7.10～12. 7.18	教育委員会で本調査
5	江川南遺跡第15地点	東久保2街区1画地	1,050	2,375	共同住宅	12.12. 8～12.12.26 13. 1.10～13. 1.19	試掘後遺跡調査会で本調査
6	亀久保堀跡遺跡第25地点	東久保8街区9画地	79	187	個人住宅	— 12. 4.10～12. 4.12	教育委員会で本調査
7	亀久保堀跡遺跡第26地点	東久保6街区13画地	36	105	個人住宅	12. 5.11～12. 5.18	試掘
8	亀久保堀跡遺跡第27地点	東久保31街区2・3画地	180	1,011	駐車場	12. 5.29～12. 6. 1	試掘
9	亀久保堀跡遺跡第28地点	東久保29街区3-6・9画地	1,029	1,365	整地工事	12. 6.29～12. 7. 4	試掘
10	東久保遺跡第25地点	東久保18街区13画地	50	135	個人住宅	12. 4.13～12. 4.14	試掘
11	東久保遺跡第26地点	東久保31街区9画地	833	1,107	砂利敷駐車場	12. 4.14	試掘
12	東久保遺跡第27地点	東久保14街区8画地	30	130	個人住宅	12. 6.29～12. 7. 4	試掘
13	東久保遺跡第28地点	東久保4街区18・20画地	16	218	個人住宅	12. 6.30～12. 7. 4	試掘
14	東久保遺跡第31地点	東久保15街区26画地	87	126	個人住宅	12. 6. 7	試掘
15	東久保遺跡第33地点	東久保15街区24画地	22	128	個人住宅	12. 8. 2～12. 8. 3	試掘
16	東久保遺跡第34地点	東久保18街区15画地	38	110	個人住宅	12. 8.29～12. 8.30	試掘
17	東久保遺跡第35地点	東久保23街区3・4画地	46	139	個人住宅	12.12. 7～12.12. 9	試掘
18	東久保遺跡第36地点	東久保15街区21・22画地	40	135	個人住宅	13. 1.19～13. 1.25	試掘
19	東久保遺跡第37地点	東久保15街区13・33画地	40	149	個人住宅	12.12.11	試掘
20	東久保遺跡第39地点	東久保4街区8・9画地	117	317	個人住宅	13. 3.22～13. 3.27	試掘
21	東久保西遺跡第10地点	東久保11街区3・11画地	136	1,760	店舗	12. 5. 8～12. 5.10	試掘
22	東久保南遺跡第21地点	東久保64-1街区	288	1,283	共同住宅	13. 1.15～13. 1.31	試掘
23	東久保南遺跡第22地点	東久保60街区1画地	1,112	2,703	中古車展示場	13. 2. 4～13. 2.15 13. 2.14～13. 2.26	試掘後遺跡調査会で本調査
24	東久保南遺跡第23地点	東久保48街区6画地	97	208	個人住宅	13. 3. 7～13. 3. 8	試掘
25	西ノ原遺跡第118地点	大井・苗間59街区45画地	214	548	店舗兼共同住宅	12. 4. 3～12. 4.12	試掘
26	西ノ原遺跡第119地点	大井・苗間18街区4画地	221	221	倉庫建設	— 12.11.15～12.12. 6	試掘後遺跡調査会で本調査
27	中沢前遺跡第22地点	大井・苗間59街区45画地	20	212	個人住宅	12. 5.25～12. 5.26	試掘
28	神明後遺跡第13地点	苗間302-1	154	694	個人住宅	12. 4.17～12. 4.19	試掘
29	神明後遺跡第14地点	苗間252-2	196	357	共同住宅	12. 8.18～12. 8.23	試掘
30	大井宿遺跡第3地点	大井80街区8画地	150	605	高齢者介護施設	12. 7. 7～12. 7.13	試掘
31	大井宿遺跡第4地点	東久保12街区8画地	20	122	個人住宅	12. 8.28～12. 8.30	試掘
32	大井宿遺跡第5地点	大井・苗間79街区7画地	288	781	駐車場	12.10.24～12.10.25	試掘
33	大井宿遺跡第6地点	大井1052-1～2・1071	324	2,300	長屋住宅	12.11.28～12.12.15	試掘
34	大井氏館跡遺跡第13地点	大井1-8-1	30	76	事務所	12.11.21～12.11.24	試掘
35	本村遺跡第86地点	大井・苗間86街区1～5	1,528	5,745	公衆浴場	12. 4.19～12. 6.10 12. 5.15～12. 6.29	試掘後遺跡調査会で本調査
36	本村遺跡第87地点	大井・苗間130街区2画地	72	165	個人住宅	12. 5.31～12. 6. 3	試掘
37	本村遺跡第88地点	大井・苗間89街区6画地	43	154	個人住宅	12. 6.27～12. 7. 3	試掘
38	本村遺跡第89地点	大井・苗間113街区1･2画地	326	942	分譲住宅	12. 7.19～12. 8. 1	試掘

Ⅸ　西ノ原遺跡の調査

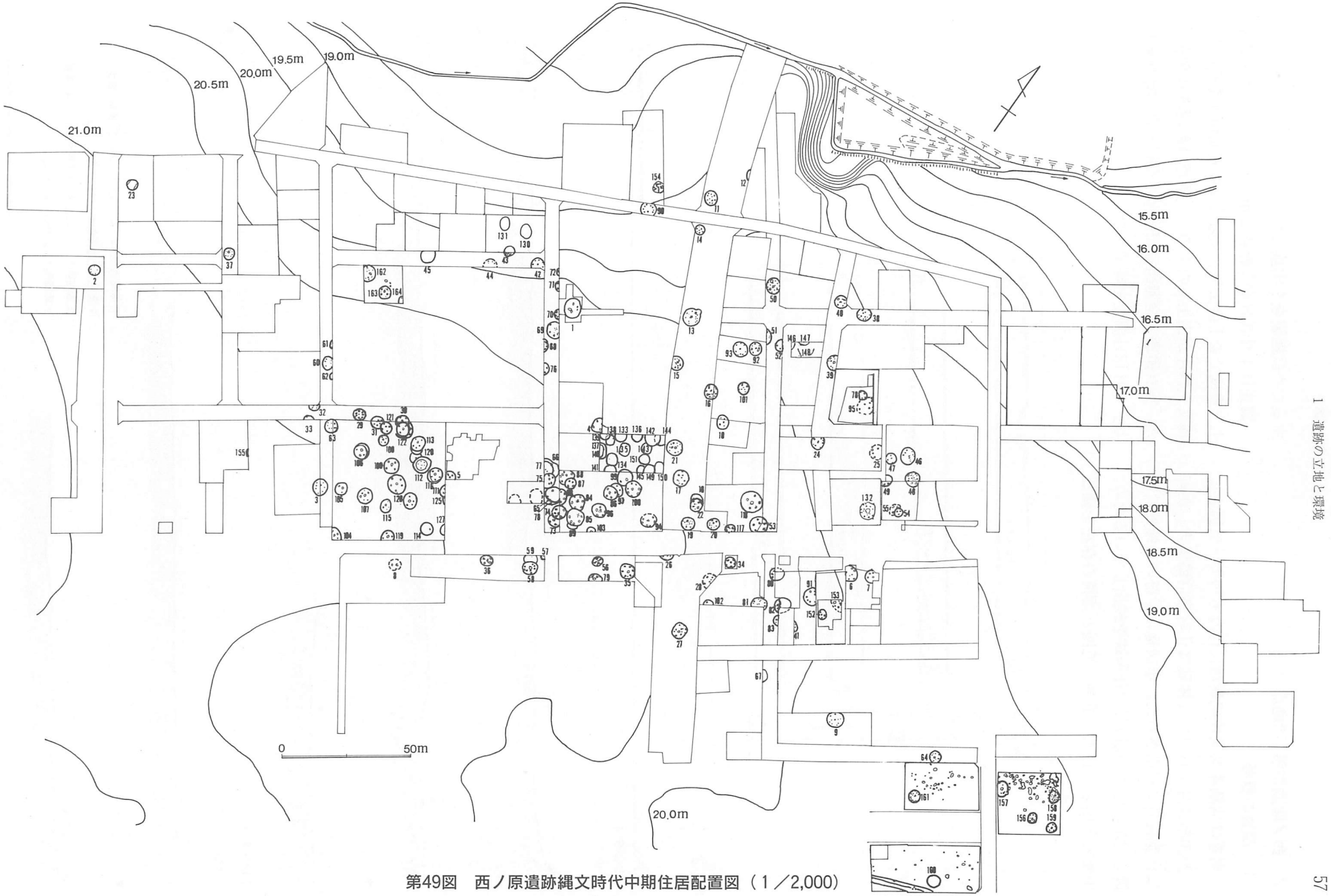
1　遺跡の立地と環境

西ノ原遺跡は、東武東上線ふじみ野駅の南西約300m、さかい川の谷頭部から約500m下った右岸、標高18～21mに位置する。さかい川は現在の富士見市勝瀬字茶立久保付近に湧水源を持つ伏流水で、東から西へ流れて入間川の支流新河岸川に注ぐ。かつては水量も豊富であったと言われるが、現在は下水路となっている。西ノ原遺跡との高低差は2～3mで、武蔵野台地縁辺で一段低い部分、さかい川が侵食によって作り出した低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出している。昭和40年代頃までは武蔵野の面影を残す農村地帯であったが、ここ数年開発の増加により遺跡の破壊が進んでいる。と、同時に発掘調査も遺跡面積10haの約40%が調査されてきている。1971年以来2001年12月現在で120地点に及ぶ調査で明らかになった遺跡の時期は、確認された遺構と遺物から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、平安時代、中世、近世である。特に縄文時代中期には、160軒を超す住居跡が環状集落として形成され町内において東台遺跡と共に中期全般を通した良好な大規模集落跡であったことがわかる。

2001年12月現在の調査状況によると、縄文時代中期の住居跡が164軒確認されている。

第48図　西ノ原遺跡の地形と調査区（1／4,000）

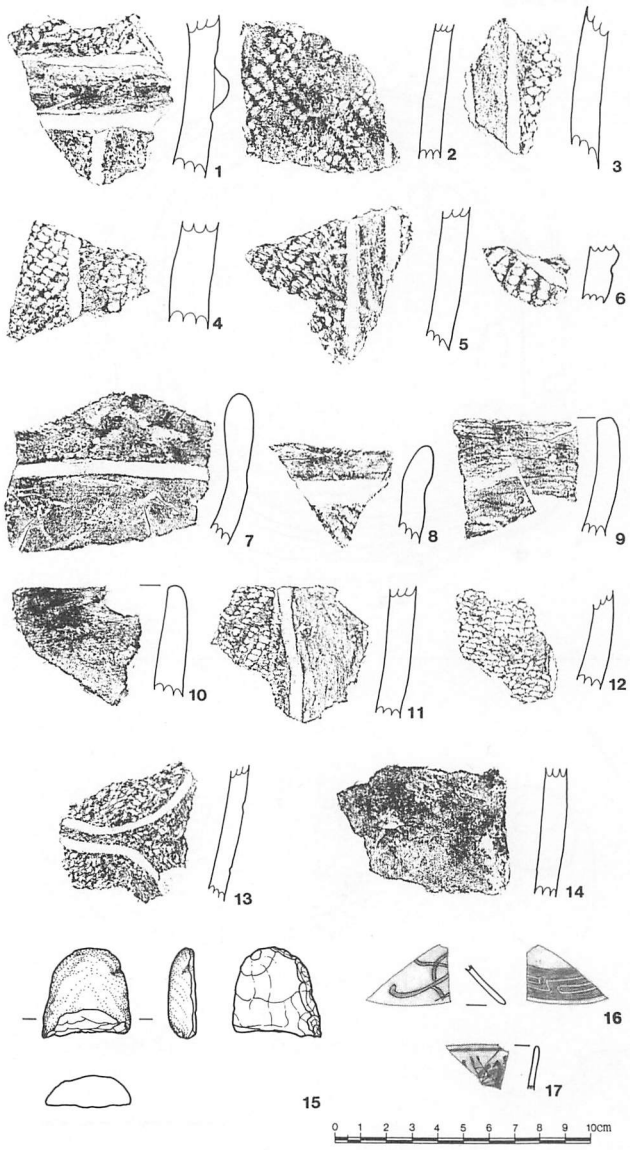


第49図　西ノ原遺跡縄文時代中期住居配置図（1／2,000）

（2）出土遺物

1～14は遺構外出土の縄文土器片である。1は大型深鉢の口縁下部から胴上部で地文縄文。2はＲＬ縄文、3～5は地文縄文で2本の沈線間を磨滅した直下懸垂文をもつ。3はＬＲＬ、4はＲＬＲの複節縄文で、5は単節のＲＬ縄文を縦に施文する。6はＲＬ縄文を地文とし連弧文の上部が遺存する。1～6は加曽利ＥⅡ式。7は波状口縁深鉢で口縁下に凹線をめぐらす。8は地文縄文の9は無文の口縁部片。10～12は同一個体で、無文口縁胴部はＲＬ縄文を広く弧状に磨消す。13は地文の縄文を沈線で弧状に区画し他を磨消す。14は浅鉢の体部片。7～14は中期末葉のもの。割愛した8小片も同時期。15は片岩製の打製石斧で基部が残る。

16は染付端反碗の蓋で19世紀の肥前産。内面は墨弾き、外面は唐草文。17は染付端反碗で19世紀の瀬戸産。外面は草花文。



第51図　西ノ原遺跡第118地点出土遺物（1／3）

3　西ノ原遺跡第119地点

（1）調査の概要

調査は倉庫の建設に伴うもので、原因者より2000年10月12日付で「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は遺跡範囲の中央やや北寄りに位置し、縄文時代集落の環状に巡る部分に当たり、住居の存在が予想された。申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するため試掘調査を実施した。

調査は11月3日から幅約2ｍのトレンチを設定し、重機により表土除去して遺構の存在の有無及び遺構確認面までの深さを確認した結果、調査区全域で遺構を確認した。申請者と再協議の結果開発の変更ができないため原因者負担による本調査を実施することになり、11月4日試掘調査を終了した。

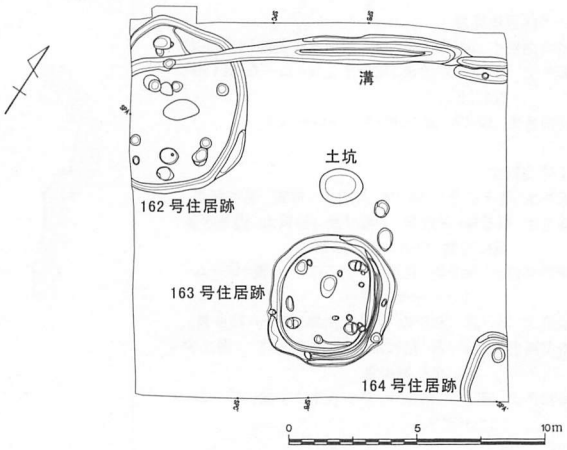
本調査は2000年11月15日から12月6日まで大井町遺跡調査会(大井町教育委員会生涯学習課事務局)が行い、縄文時代中期の住居跡3軒・土坑1基、近世溝跡1条を検出した。(大井町遺跡調査会で報告書刊行予定)

（2）本調査の概要

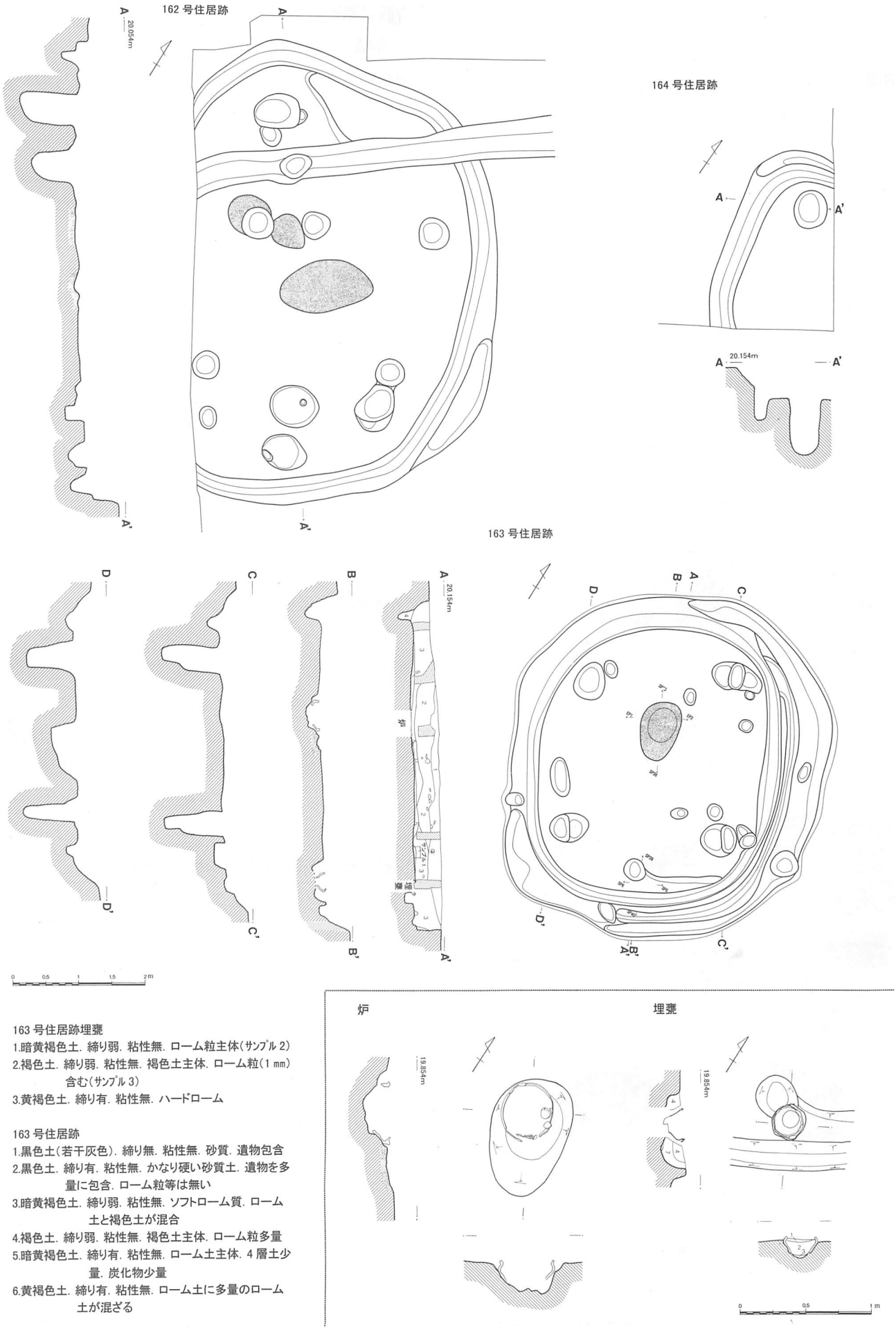
3軒検出した住居跡のうち163号住居跡は炉体土器と埋甕を検出し、埋甕内の土壌（上・下層）、埋設土器、住居覆土下層の土壌計4点をサンプル採取し、リン・カルシウム、脂肪酸について分析をした。(附編参照）また出土遺物は同住居跡の炉体土器、埋甕、完形土器を掲載したが、他の遺構については本報告で細述する。

第12表　西ノ原遺跡第119地点住居一覧表

住居番号	調査率	外　形	炉			埋甕	拡張	時　期
			地床	石囲	炉体			
162	75	隅丸方	○		○		○	勝坂Ⅲ
163	100	楕　円	○		○	○	○	EⅠ新古相
164	20	隅丸方	未発掘					EⅠ新



第52図　西ノ原遺跡第119地点遺構配置図（1／300）



163 号住居跡埋甕
1.暗黄褐色土. 締り弱. 粘性無. ローム粒主体(ｻﾝﾌﾟﾙ 2)
2.褐色土. 締り弱. 粘性無. 褐色土主体. ローム粒(1 ㎜)含む(ｻﾝﾌﾟﾙ 3)
3.黄褐色土. 締り有. 粘性無. ハードローム

163 号住居跡
1.黒色土(若干灰色). 締り無. 粘性無. 砂質. 遺物包含
2.黒色土. 締り有. 粘性無. かなり硬い砂質土. 遺物を多量に包含. ローム粒等は無い
3.暗黄褐色土. 締り弱. 粘性無. ソフトローム質. ローム土と褐色土が混合
4.褐色土. 締り弱. 粘性無. 褐色土主体. ローム粒多量
5.暗黄褐色土. 締り有. 粘性無. ローム土主体. 4 層土少量. 炭化物少量
6.黄褐色土. 締り有. 粘性無. ローム土に多量のローム土が混ざる

第53図　西ノ原遺跡第119地点162～164号住居跡（1／80）

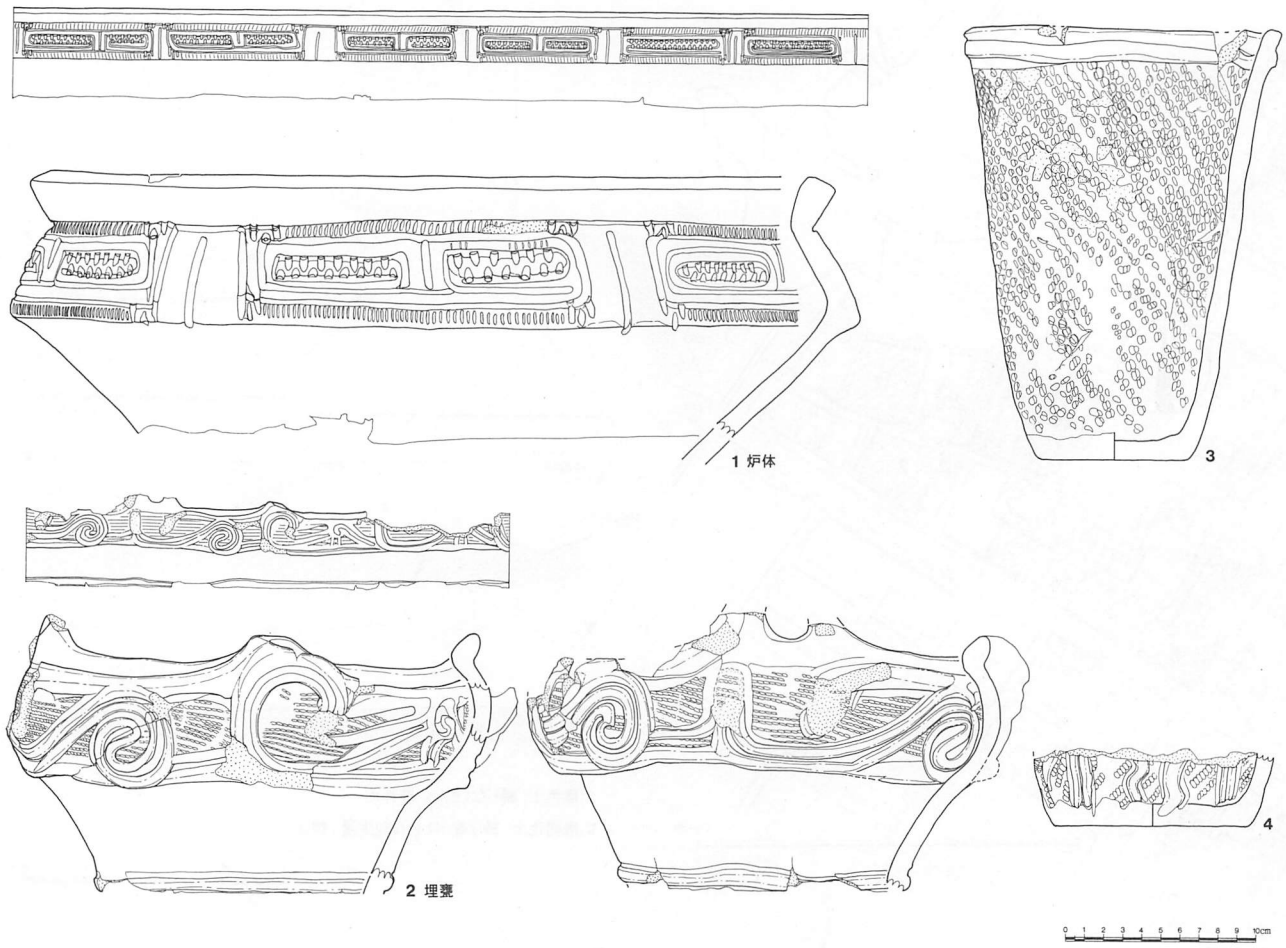
【163号住居出土土器】

1は、炉内埋設土器である。浅鉢の底を打ち欠いて炉体としたもので、口径42cm、現存高14cmである。外反する無文の口縁部と幅広い内傾する文様帯がある。文様帯は、縦位沈線で大まかに6区分され各々長方形区画6をつくる。区画内は太い沈線で出来た隆部に施文し、上端と下段には刻目をいれコーナーを交互刺突するほか、区画内隆帯の上下を千鳥状に交互刺突するが、区画内を2分割するもの4、分割しないもの2がある。6区画する縦位沈線の上下に刻みを入れる1ヶ所がある。胎土には白色微砂粒を含み、整形は丁寧で器面・体部・内面をヘラ磨きし焼成良好で赤褐色を呈する。器表・内面上部には二次被熱によるハジケ現象が著しい。勝坂式の末に近い浅鉢である。

2は、住居の南出入口の床面下に残された埋甕である。深鉢の口縁から頸部文様帯下部までを利用し、胴上部以下を打ち欠いたもので、口径22cm、現存部高13.5cmの波状口縁深鉢である。幅6.5～8cmの口縁文様帯のほとんどと頸部無文帯と胴部文様帯とを画する隆帯までが遺存する。口縁は高い環状把手と波頭に取り付く中空の隆帯が交互に各2つ作られる。

口縁部文様帯は、撚糸文を横位・斜位に全面に施文したあと、先頭が渦巻となる2本組隆帯で横につなぎ高い把手下左右を対象的にした2つのモチーフとしている。胎土には白色砂粒・白色粒子・ガラス質粉末を含み、口縁部・頸部無文帯・口縁内側を磨き整形している。頸部無文帯をもつとはいえ、立体的な波頭周辺の装飾・撚糸文の横位施文・貼付隆帯で文様全体を連続させるなど加曽利ＥⅠ新式の古相を示す。

3は、覆土下層出土の完形の筒形深鉢で、口径16cm、底径7.6cm、器高23.7cmである。口唇直下に1本の隆帯をめぐらすほか、隆帯から底までの器表全面に複節のＲＬ縄文が施文される。胎土には極少量の粗砂粒・大量の微砂粒・白色粒子を含み赤～黄褐色を呈する。勝坂末期の土器群に含まれる筒形深鉢であろう。



第54図　西ノ原遺跡第119地点163号住居跡出土土器（1／4）

西ノ原遺跡第119地点調査区全景

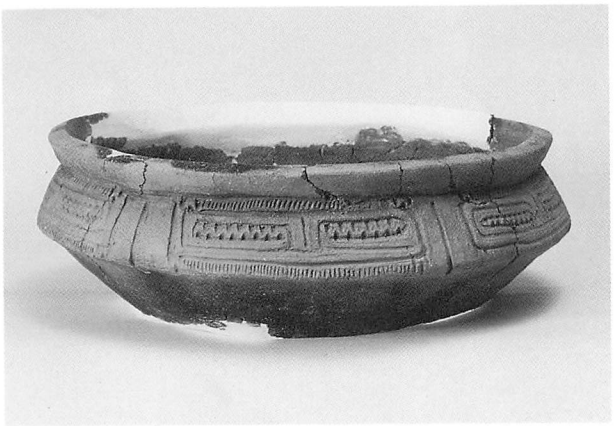
西ノ原遺跡162号住居跡

西ノ原遺跡164号住居跡

西ノ原遺跡163号住居跡炉

西ノ原遺跡163号住居跡埋甕

西ノ原遺跡163号住居跡



西ノ原遺跡163号住居跡出土土器１（炉体土器）

西ノ原遺跡163号住居跡出土土器３

西ノ原遺跡163号住居跡出土土器２（埋甕）

西ノ原遺跡163号住居跡出土土器４

巻頭図版２　　西ノ原遺跡第119地点（１）・東台遺跡第34地点（１）

西ノ原遺跡第119地点

東台遺跡第34地点

巻頭図版６　　西ノ原遺跡第119地点（２）・東台遺跡第33地点（３）　出土遺物②

36（炉体土器）

38（覆土下層）

37（埋甕）

西ノ原遺跡第119地点　163号住居跡出土縄文土器

東台遺跡第33地点　旧石器時代遺物

凡　　例

1．本書の遺構挿図の指示は以下のとおりである。

（1）縮尺はその都度図中に示している。

（2）遺構断面図の水糸高は海抜を示す。

（3）遺構図におけるscreen-toneの指示は以下のとおりである。また、遺物出土状況のドットの指示はその都度図中に示している。

地 山　　攪 乱　　焼 土

炭化物・層　　石　　遺 物

2．住居跡名は、遺跡内の通し番号である。

3．本書の遺物挿図の指示は以下のとおりである。

（1）遺物番号は地点ごとに1からはじまる。

（2）砥石実測図の断面における矢印の表示は、実線が砥面を、一点鎖線が加工痕の残存面を表す。

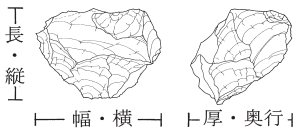
（3）遺物実測図におけるscreen-toneの指示は以下のとおりである。

縄文土器断面図 繊維の混入

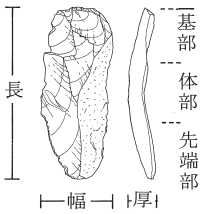
4．旧石器・縄文土器・縄文石器の出土遺物観察表に記載した計測部位及び遺存部位は以下のとおりである。

〈石核〉

最終剥離面を正面とする。



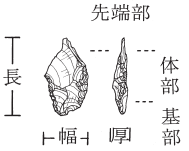
〈剥片・その他の剥片石器およびRF〉



遺存部位
A. 基部+体部+先端部
B1. 基部＋体部
B2. 体部＋先端部
C1. 基部
C2. 体部
C3. 先端部
D. 縦割れ
E. その他・不明

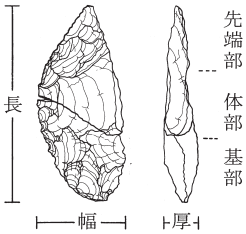
〈ナイフ形石器/尖頭器〉

ナイフ形石器

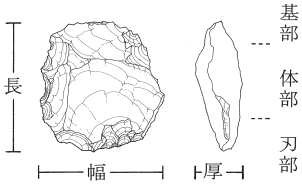


遺存部位
A. 基部+体部+先端部
B1. 基部＋体部
B2. 体部＋先端部
C1. 基部
C2. 体部
C3. 先端部
D. 縦割れ
E. その他・不明

尖頭器



〈スクレイパー（石匙を含む）〉



遺存部位
A. 基部+体部+刃部
B1. 基部＋体部
B2. 体部＋刃部
C1. 基部
C2. 体部
C3. 刃部
D. 縦割れ
E. その他・不明

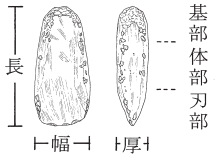
〈石鏃〉

素材剥片の背面を上面とする。

遺存部位
A. 先端部＋体部＋両脚
B. 先端部＋体部＋片脚
C1. 先端部＋体部
C2. 両脚＋体部
C3. 片脚＋体部
D1. 先端部
D2. 体部
D3. 両脚
D4. 片脚
E. 縦割れ
F. その他・不明

〈磨製石斧/打製石斧〉

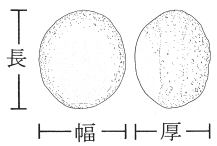
磨製石斧



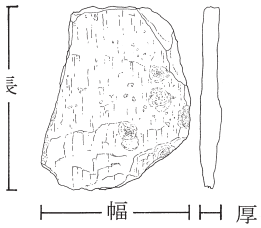
打製石斧

遺存部位
A. 基部+体部+刃部
B1. 基部＋体部
B2. 体部＋刃部
C1. 基部
C2. 体部
C3. 刃部
D. 縦割れ
E. その他・不明

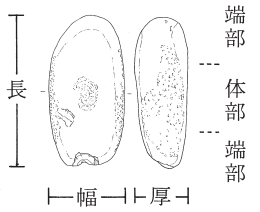
〈磨石/凹石〉



遺存部位
A. 完形
B. 残存率　3/4～
C. 残存率　1/2～3/4
D. 残存率　1/4～1/2
E. 残存率　1/4以下

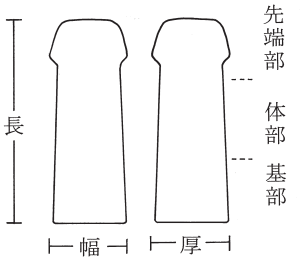


〈敲石/石錘〉



遺存部位
A. 端部＋体部＋端部
B. 端部＋体部
C1. 端部
C2. 体部
D. 縦割れ
E. その他・不明

〈石棒〉



遺存部位
A. 先端部+体部+基部
B1. 先端部＋体部
B2. 体部＋基部
C1. 先端部
C2. 体部
C3. 基部
D. 縦割れ
E. その他・不明

5．旧石器・縄文時代の遺物は以下のように分類した。

旧石器　石器分類表

器　種	群	類		器　種	群	
細石刃	（細分類無し）			剥片類	Ⅰ	二次加工ある剥片（ＲＦ） または使用痕ある剥片（ＵＦ）
尖頭器	（細分類無し）				Ⅱ	縦長剥片（石刃含む）
ナイフ形石器	Ⅰ	縦長剥片（石刃含む）使用			Ⅲ	横長剥片
		1	一側縁調整		Ⅳ	石核調整剥片
		2	二側縁調整		Ⅴ	その他の剥片
		3	基部調整		Ⅵ	砕片（チップ）
		4	切出し形			
	Ⅱ	横長剥片使用		石核	Ⅰ	細石刃核
		1	一側縁調整		Ⅱ	石刃核
		2	二側縁調整		Ⅲ	その他の石核
		3	基部調整	石斧	Ⅰ	打製石斧
		4	切出し形		Ⅱ	局部磨製石斧
	Ⅲ	不定形剥片使用			Ⅲ	磨製石斧
		1	一側縁調整	礫器	Ⅰ	片面調整礫器
		2	二側縁調整		Ⅱ	両面調整礫器
		3	基部調整	敲打器	Ⅰ	成形・調整無し
		4	切出し形		Ⅱ	成形・調整あり
角錐状石器	（細分類無し）			磨石	（細分類無し）	
スクレーパー類	Ⅰ	削器		石皿	（細分類無し）	
	Ⅱ	掻器		砥石	（細分類無し）	
	Ⅲ	彫器				

縄文　石器分類表

器　種	群	類		器　種	群	類	
尖頭器	（細分類無し）			石皿	Ⅰ	使用面が皿状に凹む	
石鏃	Ⅰ	無茎				1	凹石と併用する
	Ⅱ	有茎				2	凹石と併用しない
礫器	（細分類無し）				Ⅱ	使用面が平坦	
スタンプ形石器	Ⅰ	側縁無調整				1	凹石と併用する
	Ⅱ	側縁調整あり				2	凹石と併用しない
抉入磨石	（細分類無し）			砥石	（細分類無し）		

打製石斧	Ⅰ	短冊形	
		1	両側縁が直線的でほぼ平行し、基部～先端部の幅がほぼ一定
		2	１類に近いが、両側縁がやや外に膨らむ
		3	先端部側がやや広がる
		4	先端部側がやや狭まる
		5	両側縁に括れがある
		6	全体に湾曲ないし屈折した平面形を呈する
	Ⅱ	撥形	
		1	側縁・先端とも直線的で、定角式的な形状
		2	全体に丸みを帯びる
	Ⅲ	分銅形	
	Ⅳ	その他	
		1	略円形または楕円形の平面形を呈する
		2	不定形
磨製石斧	Ⅰ	乳棒状	
	Ⅱ	定角式	
磨石	Ⅰ	平面形が円形	
		1	厚い
		2	扁平
	Ⅱ	平面形が長円形～棒状	
		1	厚い
		2	扁平
	Ⅲ	平面形が隅丸方形または隅丸長方形	
		1	い
		2	扁平

敲打器	Ⅰ	成形・調整無し	
	Ⅱ	成形・調整あり	
石匙	Ⅰ	精製	
		1	横長
		2	縦長
	Ⅱ	粗製	
		1	横長
		2	縦長
スクレーパー	Ⅰ	削器	
	Ⅱ	掻器	
	Ⅲ	彫器	
剥片類	Ⅰ	２次加工ある剥片。所謂ＲＦ	
	Ⅱ	使用痕ある剥片。所謂ＵＦ	
	Ⅲ	石核調整剥片	
	Ⅳ	その他の剥片	
	Ⅴ	砕片	
石核	（細分類無し）		
楔状石器	（細分類無し）		
錐（ドリル）	（細分類無し）		
石錘	Ⅰ	抉入が１対	
		1	切り目あり
		2	切り目なし
	Ⅱ	抉入が２対以上	
		1	切り目あり
		2	切り目なし
石棒	（細分類無し）		

縄文　土器分類表

６期区分	群	類	
草創期			
早　期	Ⅰ	撚糸文土器	
	Ⅱ	押型文土器	
	Ⅲ	沈線文土器	
	Ⅳ	擦痕文・条痕文土器	
		1	無文または擦痕文
		2	条痕文
		3	貝殻文
前　期	Ⅰ	前半（関山・黒浜式）	
	Ⅱ	後半（諸磯・十三菩提式）	
中　期	Ⅰ	中期初頭	
		1	五領ヶ台Ⅰ式
		2	五領ヶ台Ⅱ式
		3	五領ヶ台～狢沢のいわゆる中間型式
	Ⅱ	中期前葉の勝坂式系統の土器	
		1	狢沢式
		2	勝坂Ⅰ式
	Ⅲ	中期中葉の勝坂式系統の土器	
		1	勝坂Ⅱ式
		2	勝坂Ⅲ式
	Ⅳ	阿玉台式系統の土器	
		1	阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ式
		2	阿玉台Ⅱ式
		3	阿玉台Ⅲ～Ⅳ式
		4	胎土により阿玉台式に比定しうるが、文様構成は勝坂式的である土器

６期区分	群	類	
中　期	Ⅴ	中期後葉の加曾利Ｅ式土器	
		1	「加曾利Ｅ式直前」段階
		2	加曾利ＥⅠ式古段階
		3	加曾利ＥⅠ式新段階
		4	加曾利ＥⅡ式古～中段階
		5	加曾利ＥⅡ式中～新段階
	Ⅵ	中期末葉の加曾利Ｅ式土器	
		1	加曾利ＥⅢ式
		2	加曾利ＥⅣ式
	Ⅶ	連弧文土器	
		1	隆帯または微隆起線による連弧文
		2	沈線による連弧文
	Ⅷ	曾利式及び曾利式系統の土器	
	Ⅸ	有孔鍔付土器	
後　期	Ⅰ	後期初頭の加曾利Ｅ式系統の土器	
	Ⅱ	称名寺式	
		1	Ⅰ式古段階
		2	Ⅰ式新段階
		3	Ⅱ式
	Ⅲ	堀之内式	
		1	1式
		2	2式
	Ⅳ	加曾利B式	
		1	1式
		2	2式
	Ⅴ	曽谷式	
晩　期			

縄文土器分類における「類」は、原則として同一「群」内で時系列順（旧→新）に設定した。

縄文　地文分類表

分　類		分　類	
a	矢羽状沈線文	r	刺突文／列点文
b	半截竹管の腹による条線文	s	櫛歯状条線文
j	縄文	w	集合沈線による波状文（流水文）
l	集合沈線文／太目の条線文	y	撚糸文
n	無文		

Ⅱ　西ノ原遺跡の調査

1　遺跡の立地と環境（第３図）

西ノ原遺跡は東武東上線ふじみ野駅の南約300ｍ、富士見さかい川の谷頭部から約500ｍ下った右岸、標高18～21ｍに位置する。さかい川は現在の富士見市勝瀬字茶立久保付近に湧水源を持つ伏流水で、西から東へ流れて入間川の支流新河岸川に注ぐ。かつては水量も豊富であったと言われるが、現在は下水路となっている。本遺跡はさかい川との比高差は２～３ｍで、武蔵野台地縁辺で一段低い部分、さかい川が浸食によって作り出した低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出している。昭和40年代頃までは武蔵野の面影を残す農村地帯であったが、ここ数年開発の増加により遺跡の破壊が進んでいる。同時に発掘調査も遺跡面積10haの約40％が調査されている。1971年以来2004年６月現在で128地点に及ぶ調査で明らかになった遺跡の時期は、確認された遺構と遺物から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、平安時代、中世～近世である。特に縄文時代には180軒を越す住居跡が環状集落として形成され、町内において東台遺跡と共に中期全般を通した良好な大規模集落跡であったことがわかる。

2004年６月現在の調査状況によると、縄文時代中期の住居跡が180軒確認されている。

2　西ノ原遺跡第113地点

（１）調査の概要

本地点は西ノ原遺跡の南東端に位置し、北側で第67地点、西側で第18・50・95地点、南側で第116～118地点に隣接している。

調査は店舗建設に伴うもので、原因者より1999年11月４日付で「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は遺跡の東南部に位置するため申請者との協議の結果、遺跡範囲と遺構確認の試掘調査を実施することとした。

調査区は一部が駐車場として使用されており、一度での調査が不可能なため、７回に分けて調査を実施した。各調査区に幅約２ｍのトレンチを34本設定し（第４図）、４月５日から１区の調査を開始し、12月14日に７区の調査を終了した。試掘調査の結果、旧石器時代の遺物や縄文時代の住居跡を確認したため原因者と再協議の結果、本調査を実施することとした。

本調査は2000年１月６日から３月13日まで大井町遺跡調査会が行い、旧石器時代の石器集中部１カ所、縄文時代中期の住居跡６軒、炉穴２基、土坑とピット多数、近世の溝２本を検出した。

（２）遺構と遺物（第４～31図、第１～13表、巻頭図版１・５、写真図版１～10）

〔旧石器時代〕

旧石器時代の遺構は、Ｂ区北西隅（I17～K19）にて石器集中部が１カ所検出された。平面的には直径約６ｍの範囲に分布し、垂直方向では基本層序②層（立川ローム第Ⅲ層対応）～⑤層（Ⅵ層）に分布しており、ピークは③層下部～④層（Ⅳ層下部～Ⅴ層）に認められる。この他に、K16北西部の②層上部にて、チャート製のナイフ形石器が１点検出された。

旧石器時代遺物は、合計で石器307点・礫２点が出土した。石器器種の内訳は、ナイフ形石器１点・石核10点・剥片類296点（うち砕片225点）である。石器石材は黒曜石が305点と大半を占め、他にはチャートが２点認められるのみである。

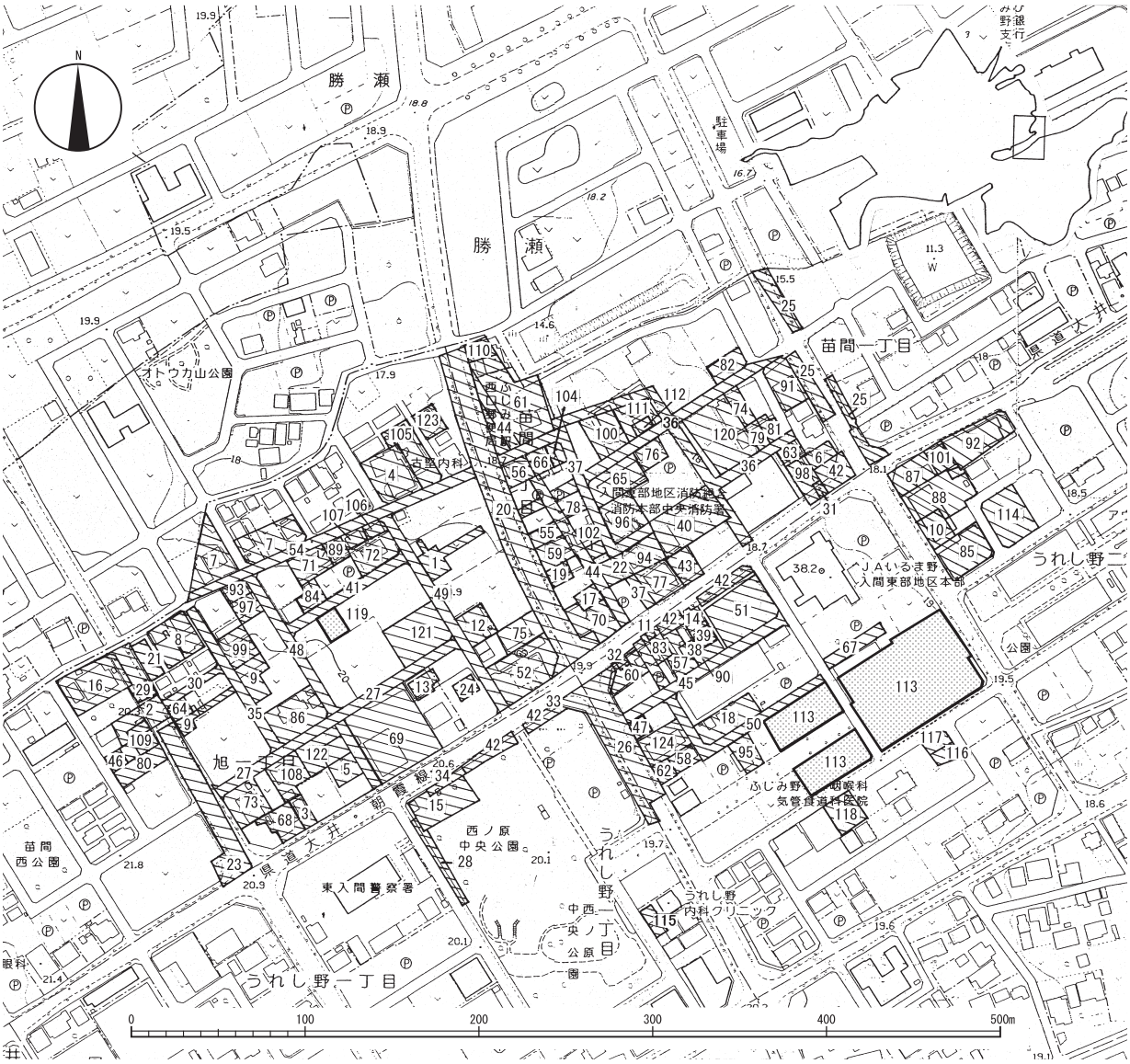
１はチャート製のナイフ形石器。先述の通り石器集中部の範囲からやや東に外れた位置からの検出である。不定形剥片を使用し、一側縁調整が施される。本地点にて検出された旧石器時代遺物のうち、チャート製の石器はこの他にRFが１点、石器集中部より検出されたのみである。

２～18は黒曜石製のRF。3・10・11・13は縦長剥片、その他は不定形剥片を素材とし、縁辺に調整または使用痕とみられる微細剥離が認められる。

19・20は黒曜石製の接合資料。19が20から剥離される。19には調整剥離や使用痕は視認されず、20の図正面右側縁に調整または使用痕とみられる微細な剥離が認められる。したがって、20の調整として19が剥離されたものと考えられる。

21～23は黒曜石製の石核で、いずれも極限まで剥離されているものとみられる。21は正面左端に微細な剥離が認められ、削器または掻器として再利用されている可能性があると考えられる。

石器集中部の性格については、本格的な石器接合作業を実施していないため、詳細を述べる事は難しい。現段階ではまず水平・垂直の分布範囲がまとまってい



第３図　西ノ原遺跡の地形と調査区（1/4,000）

第１表　西ノ原遺跡第113地点　住居跡一覧表

（ ）内は残存値及び確認された規模，備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	住居名	位置	形状	規模 長軸(cm)	規模 短軸(cm)	規模 深さ(cm)	規模 標高(m)	炉 地床	炉 炉体	炉 石囲	埋甕	周溝	ピット数	貼床	備考
5･6･9	156号住居跡	E～G3.4	円形	426	365	14	18.37	×	○	×	－	－	7	－	写1
5･6･10	157号住居跡	B～D6.7	楕円形	594	(392)	22	18.47	○	×	×	－	－	9	－	西側調査区外へ延びる／写1
5･6･11･12	158号住居跡	C～E1.2	不定形	(669)	(455)	16	18.38	×	×	○	－	－	30	－	土坑6より旧／写2
5･6･12	159号住居跡	F.G1.2	円形	(434)	(415)	13	18.23	－	－	－	－	－	5	－	写2
5･7･13･14	160号住居跡	L.M12.13	円形	547	490	35	18.24	×	×	○?	－	－	8	○	写2
5･6･14･15	161号住居跡	C～E14.15	楕円形	512	440	16	18.72	×	○	○?	2	－	12	－	写3

第２表　西ノ原遺跡113地点　遺構一覧表

（ ）内は残存値及び確認された規模，備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	遺構名	グリッド	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	標高(m)	主軸方位	遺物	時期	備考
5･7･8	石器集中部	B区北西部	－	－	－	－	－	－	○	旧石器	写1
5･6･15	炉跡1	B.C13.14	－	147	104	25	18.34	－	○	縄文時代	
	炉跡2	C12	円形	69	68	24	18.31	－	×	縄文時代	
5･7	溝1	L.M13～19	－	2450	300	12～20	18.32～18.40	N-80°-E	○	近世か	P22･23･24･25･81と切り合う
5･6	土坑1	B.C1	長楕円	95	50	16	18.50	N-46°-E	×	不明	
5･6･16	土坑2	B.C1	長楕円	318	125	22	18.40	N-37°-W	×	不明	P17と切り合う
	土坑3	B.C1.2	不定形	(410)	192	22	18.36	N-37°-E	○	縄文時代か	2基か？。P1より旧／写3

3　西ノ原遺跡第119地点

（1）調査の概要

調査は倉庫の建設に伴うもので、原因者より2000年10月12日付で「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は遺跡範囲の中央やや北寄りに位置し、縄文時代集落の環状に巡る部分に当たり、住居の存在が予想された。申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するため試掘調査を実施した。

調査は11月３日から幅約２ｍのトレンチを設定し、重機により表土除去して遺構の存在の有無及び遺構確認面までの深さを確認した結果、調査区全域で遺構を確認した。申請者と再協議の結果開発の変更ができないため原因者負担による本調査を実施することになり、11月４日試掘調査を終了した。

本調査は2000年11月15日から12月６日まで大井町遺跡調査会（大井町教育委員会生涯学習課事務局）が行い、縄文時代中期の住居跡３軒・土坑１基、近世溝１条を検出した。

（2）遺構と遺物（第32～46図、第14～23表、巻頭図版２・６、写真図版11～17）

〔縄文時代〕

縄文時代に帰属する遺構は、竪穴住居跡３軒（162号～164号住居跡）・土坑１基（土坑１）である。

【162号住居跡】調査区の北西隅に位置する。プラン西側は調査区外に位置し、全体の約75％を検出したものと考えられる。北側で近世溝に切られる。平面形は隅丸方形を呈する。床面は平坦で、深さ約30㎝の周溝がほぼ全周に巡る。壁は床面から約55㎝残存する。柱穴はP1～P11の11基が確認された。これらのうちP1～P5・P8・P9の７基が、深さと位置から見て主柱穴であると考えられる。これらの配置から、１回以上の建て替え（拡張）が行われた５本柱穴の住居であると考えられ、西側の未調査部分にP3に対応する柱穴が存在するものと推測される。またP6とP7は浅いため主柱穴とは考えづらく、入口に関連する施設と考えられる。主軸方位はN－35°－Wを指す。炉は住居プランの中心からやや東よりに位置する地床炉である。炉の西～北西側に多量の焼土を伴うP10・P11が位置し、拡張前の炉の痕跡であると考えられる。

出土遺物は、縄文土器952点・土製品1点・石器37点・礫175点を数える。炉体土器・埋甕とも確認されない。覆土中に含まれる土器は、勝坂Ⅲ式から加曾利ＥⅠ式に比定されるものが大半を占め、その中でも勝坂式の末に近いものから加曾利Ｅ式初頭のものが主体的である。

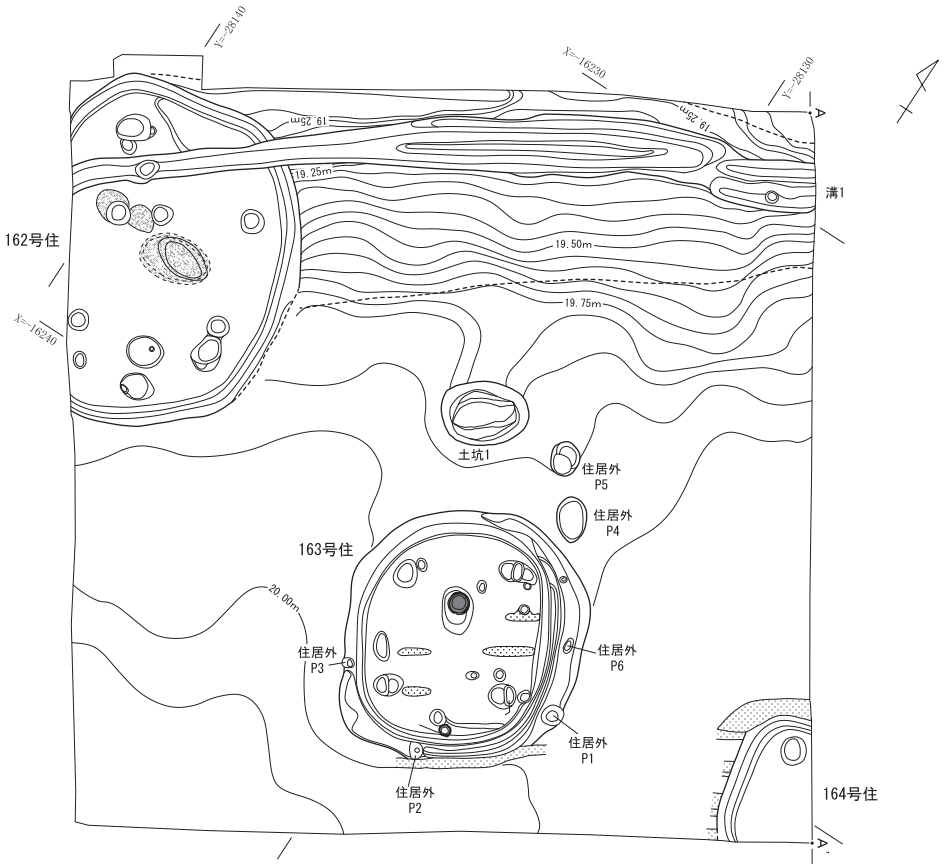
【163号住居跡】調査区の中央やや南よりに位置する。平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で、深さ約20㎝の周溝が全周に巡り、東側～南東側ではさらに外側にやや浅い周溝を伴い、二重となる。壁は床面から約40㎝残存する。柱穴は周溝より内側にP1～P15の15基が確認され、周溝より外側に「住居外ピット」として住居外P1～同P6の６基が確認された。これらのうち、P2・P4・P5・P6・P8・P9・P12・P13・P14の９基が、深さと位置から見て主柱穴であると考えられる。主軸方位はN－28°－Wを指す。柱穴の配置や周溝の状態から、１回以上の建て替えが行われたものと考えられる。住居外ピットについては、住居外P1～P3・P6は住居に付随する支柱穴等である可能性が高いと考えられるが、住居外P4・5は住居プランからやや離れた位置にあり、163号住居跡に関連するものかどうか不明である。炉は住居プランの中心から北よりに位置する埋甕炉で、底部を欠いた浅鉢を炉体とする。南側では埋甕が１基検出され、こちらは深鉢の胴部以下を欠いた土器を用いる。

なお本住居跡の埋甕については、覆土に関してリン・カルシウム分析を、土器胎土に関してリン・カルシウム分析及び脂肪酸分析を実施した。その結果、埋甕の胎土中に動物質の脂肪酸が残留しており、埋甕内に動物遺体が存在した可能性が指摘されている。詳細は「Ⅱ－３－（3）163号住居跡の埋甕内容物に関する調査」を参照されたい。

出土遺物は、縄文土器1,300点以上（細片多数含む）・土製品５点・石器55点・礫227点を数える。炉体土器は勝坂式末の浅鉢の底を欠いたものであり、埋甕は加曾利ＥⅠ式新段階の古相に帰属する深鉢の頸部以上を用いたものである。これらにより、163号住居跡の帰属時期は加曾利ＥⅠ式新段階古相と考えられる。

【164号住居跡】調査区の南東隅に位置する。プランの大部分が調査区外に位置し、全体の約20％を検出したものと考えられる。平面形は隅丸方形と考えられる。床面はおそらく平坦と考えられ、深さ約35㎝の周溝が確認される。壁は床面から約１ｍ残存する。柱穴はP1の１基のみ確認された。炉は今回の調査範囲においては検出されなかった。

出土遺物は、縄文土器115点・石器３点・礫30点を



基本層序
①．黒褐色土．粘性あり．締まり弱．ローム粒(0.2mm以下)少量．耕作土
②．暗褐色土．ソフトローム．地山

溝1覆土
1.茶褐色土．ロームブロック(20～50mm)含む

0　5m

第32図　全体図・東壁土層図（1/150）

第14表　西ノ原遺跡第119地点　住居跡一覧表

○内の数値は炉の数，( )内は残存値及び確認された規模，備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	住居名	形　状	規模				炉			埋甕	周溝	ピット数	貼床	備　考
			長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	標高(m)	地床	炉体	石囲					
32・33・34	162号住居跡	隅丸方形	700	(460)	60	19.32	③	×	×	×	○	(9)	−	P1・P5は伴わない可能性あり。 住居外P1～P3・P6より旧？溝1より旧／写11
32・35・36	163号住居跡	楕円形	490	470	50	19.44	×	○	×	○	○	15	−	写11
32・37	164号住居跡	隅丸方形か	(250)	(188)	56	19.50	−	−	−	−	○	(1)	○	写11

第15表　西ノ原遺跡第119地点　遺構一覧表

備考欄の写番号は写真図版番号

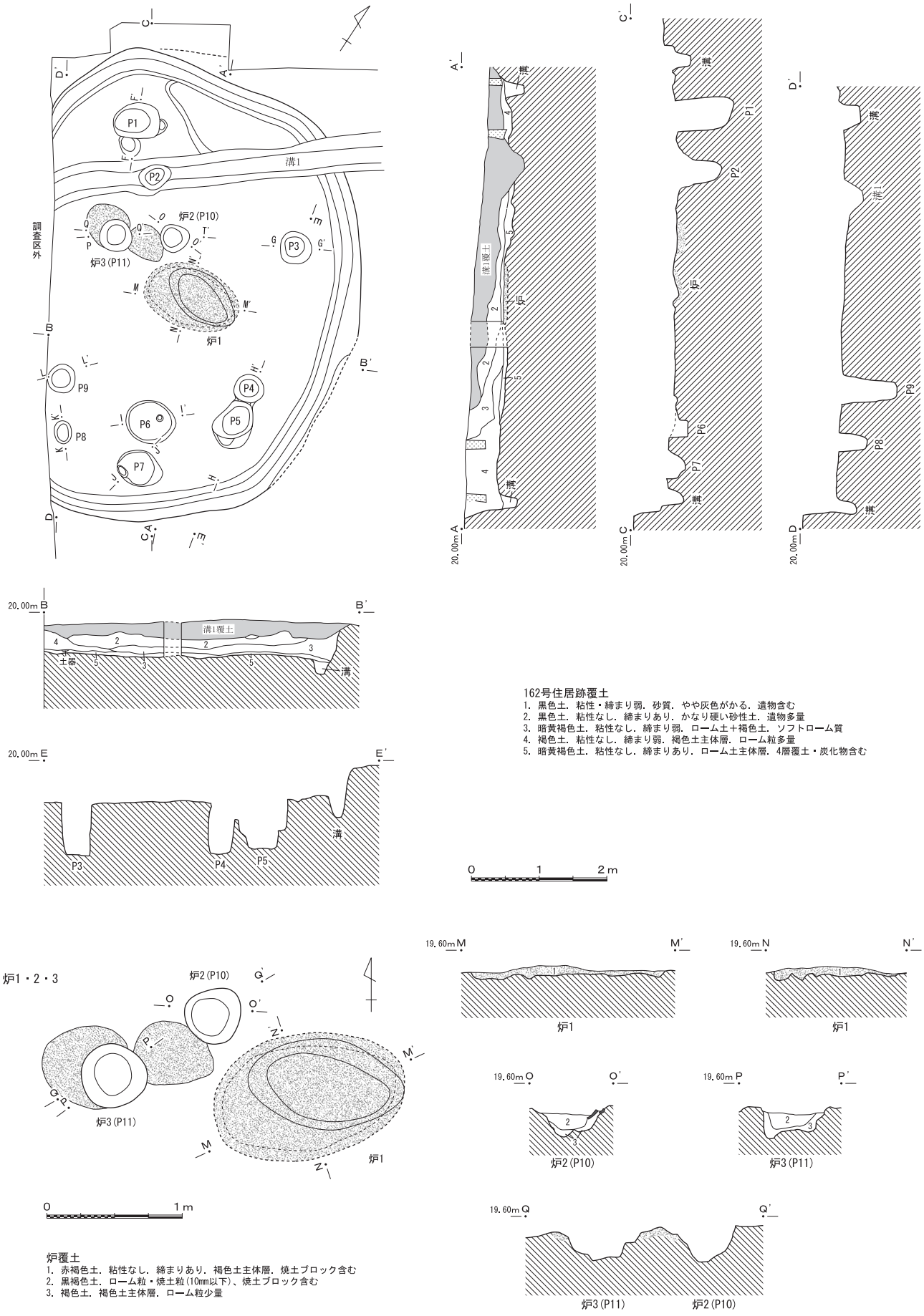
図版番号	遺構名	形　状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	標高(m)	主軸方位	遺物	時期	備　考
32・37	土坑1	楕円形	173	125	60	19.25	N−50°−E	×	縄文時代中期	落とし穴か／写11
32	溝1	箱薬研	1470	228	90	19.95	N−33°−E	○	近世	顕著な底部の傾斜はみられない。162号住居跡より新

第16表　西ノ原遺跡第119地点　ピット一覧表

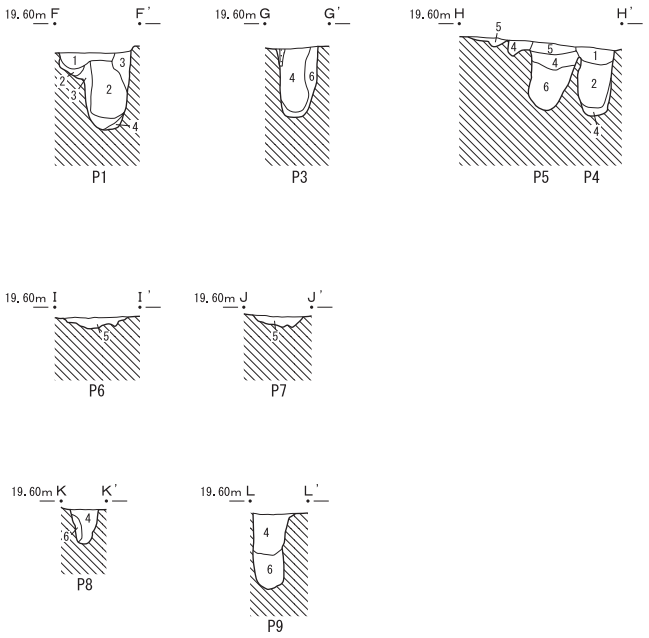
( )内は残存値及び確認された規模，備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	ピットNo.	形　状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備　考
32	1	方形か	(42)	(40)	52	19.53	163号住より旧？
	2	楕円形か	(35)	(28)	47	19.55	163号住より旧？
	3	長方形	(28)	(18)	46	19.55	163号住より旧？
32	4	楕円形	80	58	22	19.71	
	5	楕円形	67	56	43	19.45	
	6	長楕円形	(31)	(16)	33	19.47	163号住より旧？

162号住居跡



第33図　162号住居跡（1）（1/80，1/40）

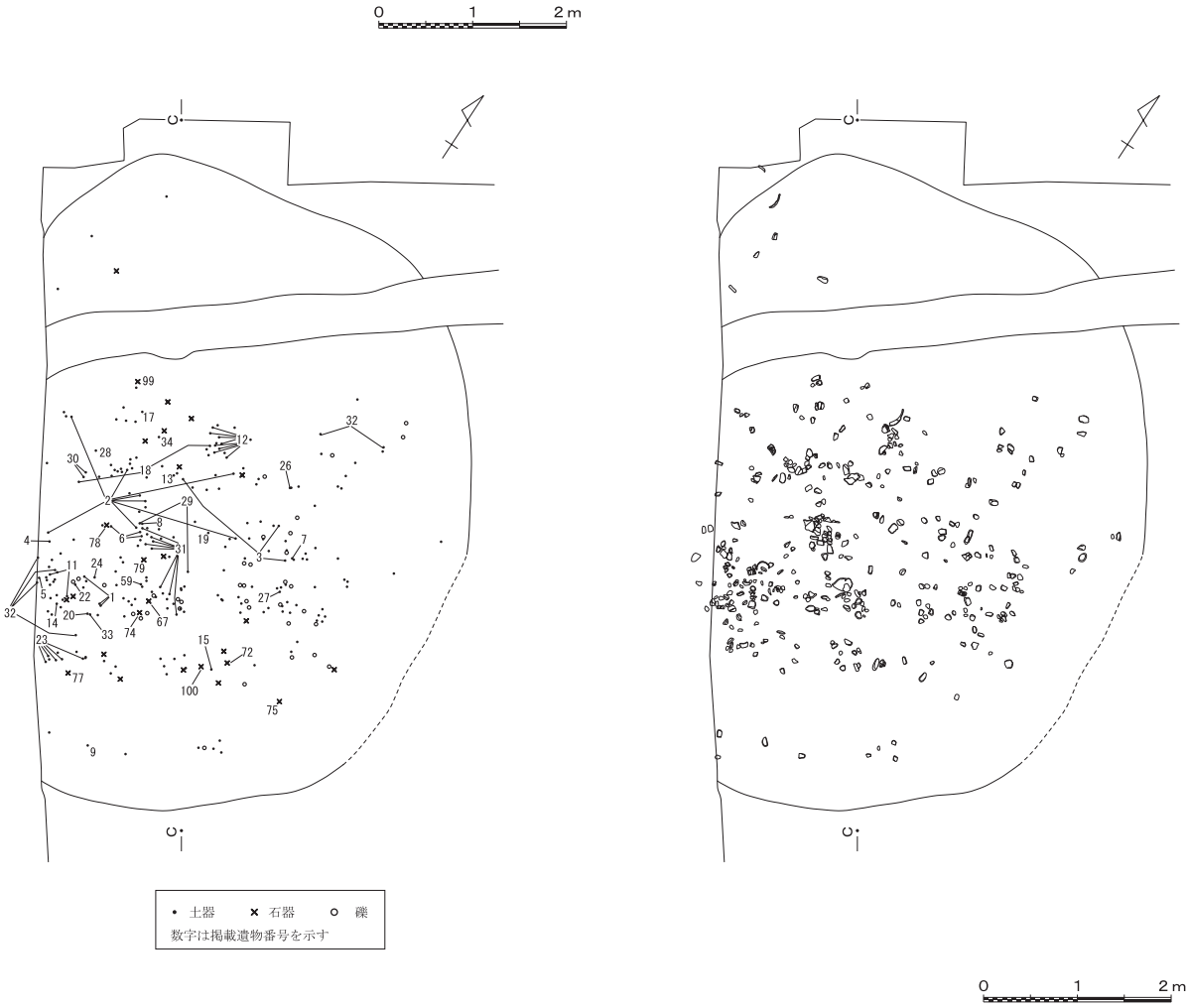


ピット覆土
1. 黒褐色土．粘性なし．締まり弱．黒褐色土主体層．
ローム粒(10mm以下)・ハードロームブロック(20～30mm)含む
2. 黒褐色土．粘性なし．締まり弱．黒褐色土主体層．
ローム粒(10mm以下)・ロームブロック(20mm大)少量
3. 暗褐色土．粘性なし．締まり弱．暗褐色土主体層．
ローム粒(10mm以下)少量
4. 暗黄褐色土．粘性・締まりなし．ローム崩落土＋褐色土．砂性
5. 暗黄褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム土主体層
6. 暗褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム粒主体層．炭化物少量

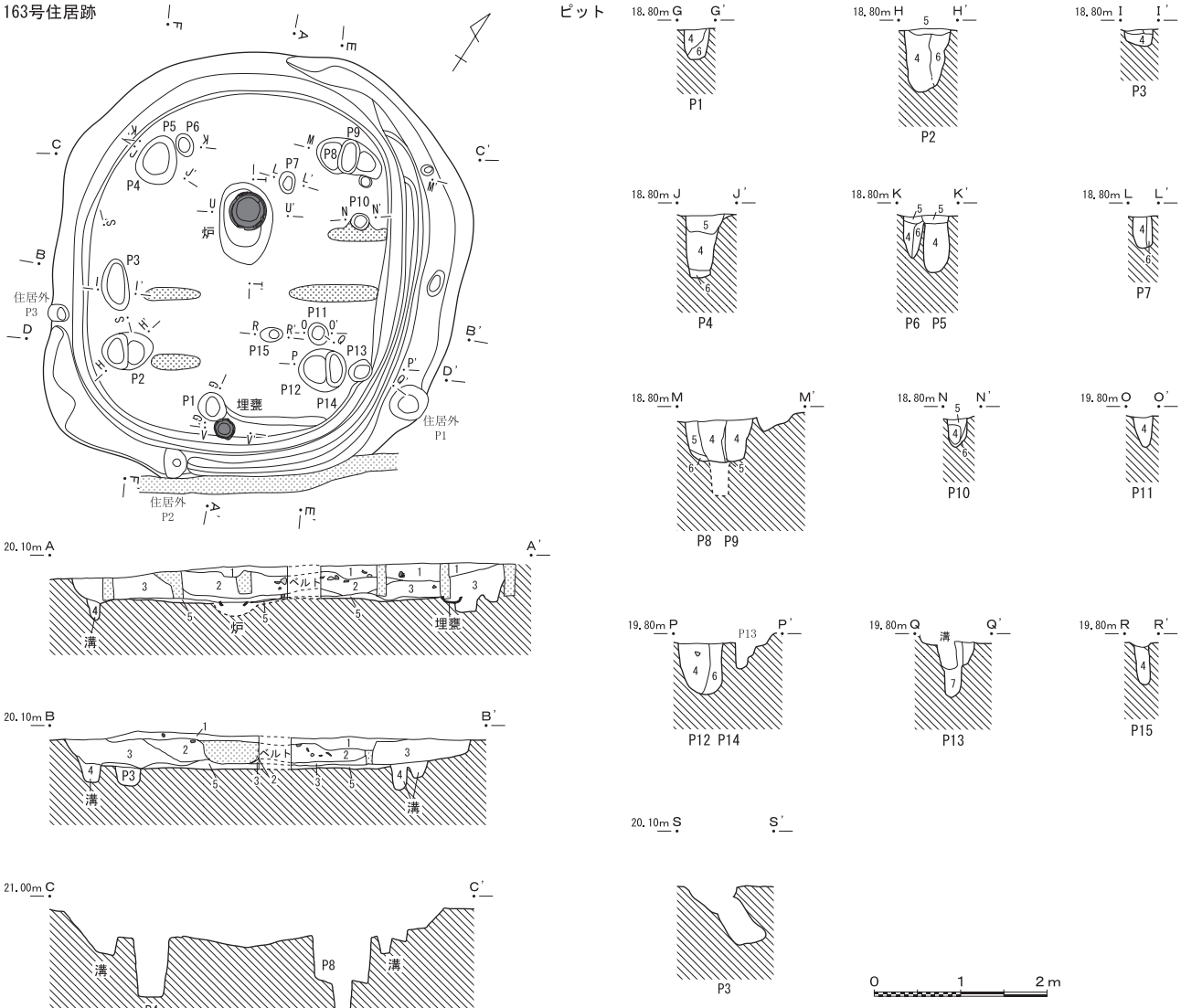
第17表　162号住居跡内ピット一覧表

ピット No.	形 状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	標 高 (m)	備　　考
1	楕円形	67	54	82	18.47	住居に伴わない可能性が高い
2	楕円形	(47)	(35)	63	18.67	上部を溝1に切られる
3	隅丸方形か	46	46	75	18.60	
4	円形	44	44	84	18.62	住居に伴わない可能性が高い。P5より新
5	楕円形	72	52	77	18.68	P4より旧
6	楕円形	75	62	13	19.37	
7	楕円形	68	52	11	19.39	
8	楕円形	30	25	36	19.15	
9	円形	42	40	80	18.67	

( )内は残存値及び確認された規模



第34図　162号住居跡 (2) (1/80)



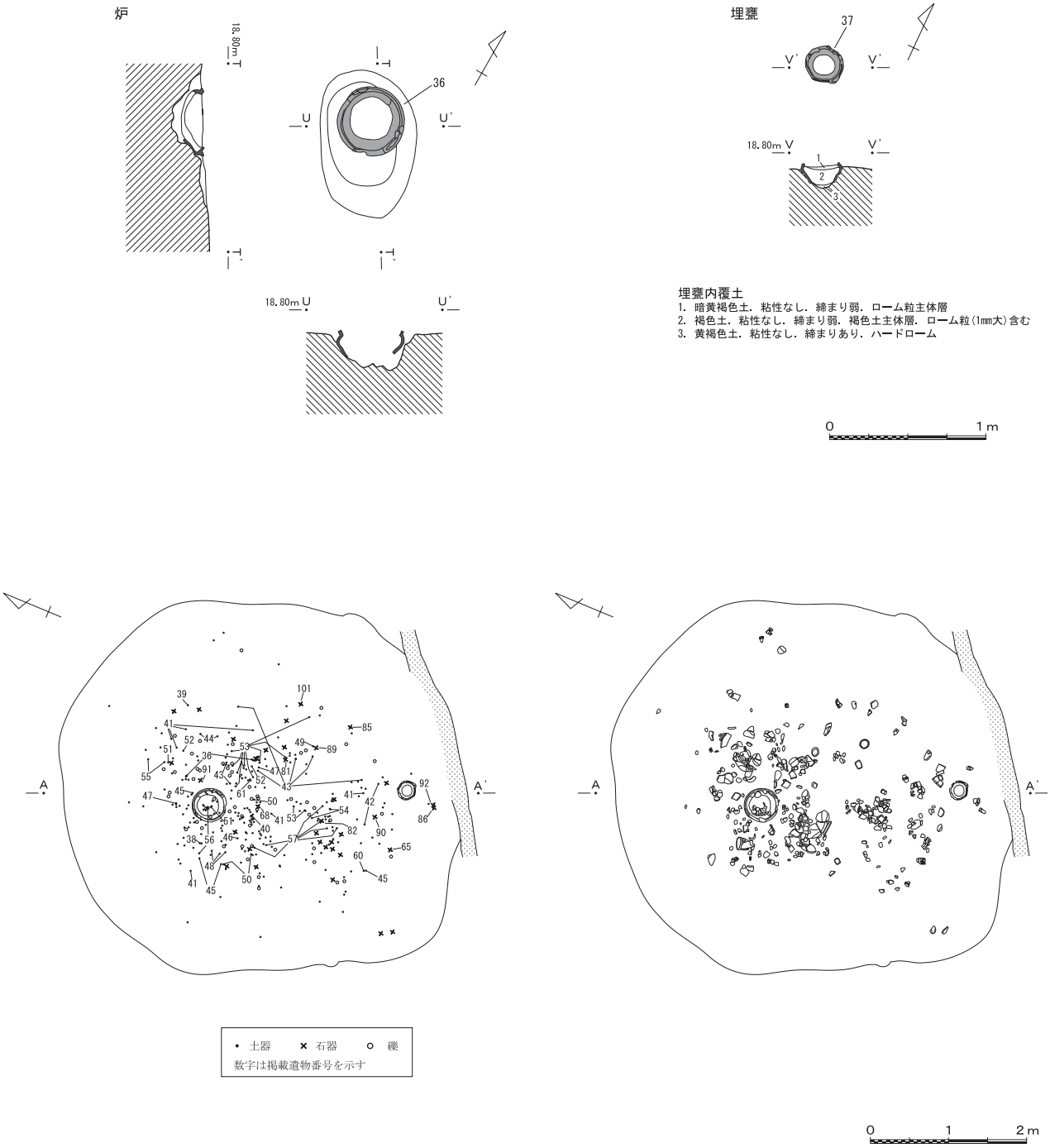
163号住居跡・ピット覆土
1. 黒色土．粘性・締まり弱．砂質．やや灰色がかる．遺物含む
2. 黒色土．粘性なし．締まりあり．かなり硬い砂性土．遺物多量
3. 暗黄褐色土．粘性なし．締まり弱．ローム土＋褐色土．ソフトローム質
4. 褐色土．粘性なし．締まり弱．褐色土主体層．ローム粒多量
5. 暗黄褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム土主体層．4層覆土・炭化物含む
6. 黄褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム主体層
7. 褐色土．粘性なし．締まりあり．褐色土主体層．
ローム粒・炭化物少量．ハードロームブロック(20mm大)含む

第18表　163号住居跡内ピット一覧表

ピットNo.	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
1	円形	32	30	35	19.35	
2	楕円形	69	43	74	18.97	
3	長楕円形	69	30	68	19.83	
4	方形か	45	(35)	74	18.97	5Pと切り合う
5	方形か	30	(22)	66	19.00	4Pと切り合う
6	楕円形	27	20	48	19.16	
7	楕円形	25	20	37	19.28	
8	円形か	(26)	40	46	19.17	9Pより旧
9	楕円形か	53	37	100	18.76	8Pより新。2基の可能性あり
10	方形	20	19	33	19.33	
11	楕円形	26	23	36	19.33	
12	円形か	52	48	60	19.09	14Pより新
13	楕円形	27	22	64	19.27	
14	楕円形	42	23	88	18.83	12Pより旧
15	楕円形	26	16	48	19.21	

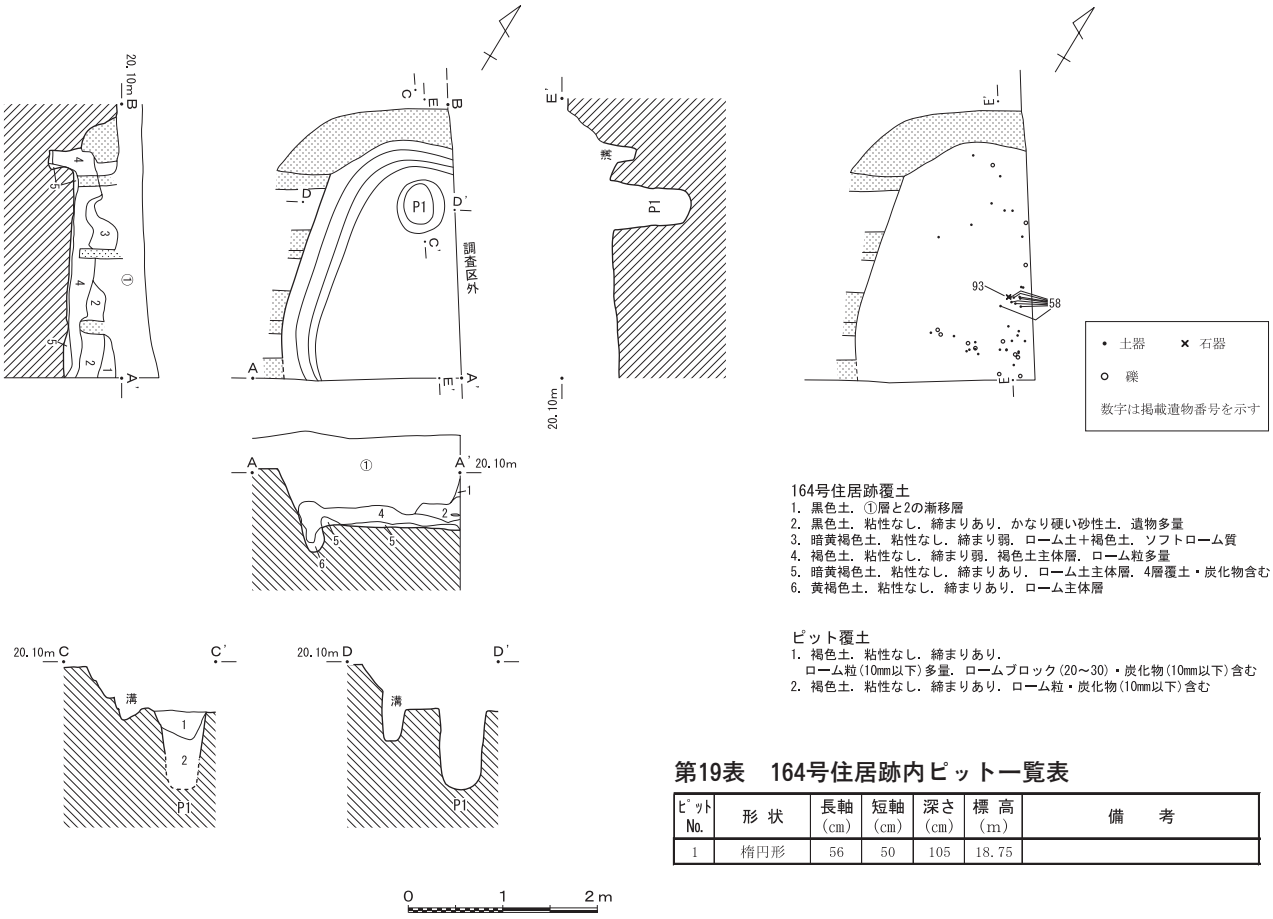
( )内は残存値及び確認された規模

第35図　163号住居跡 (1) (1/80)



第36図　163号住居跡 (2)（1/80，1/40）

164号住居跡



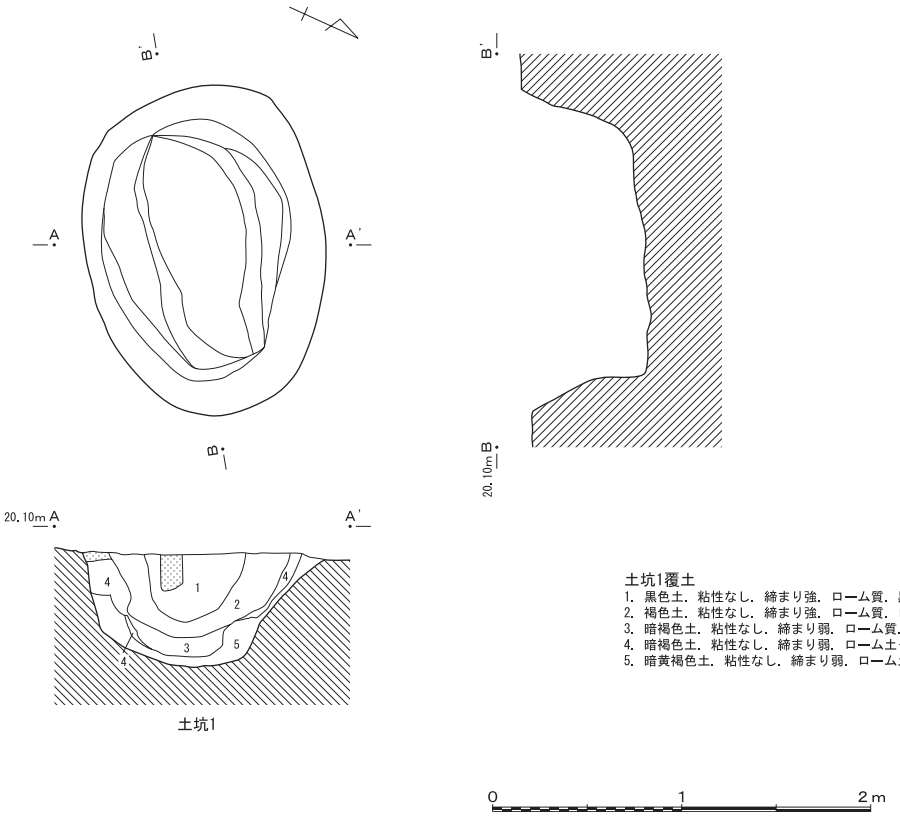
164号住居跡覆土
1. 黒色土．①層と2の漸移層
2. 黒色土．粘性なし．締まりあり．かなり硬い砂性土．遺物多量
3. 暗黄褐色土．粘性なし．締まり弱．ローム土＋褐色土．ソフトローム質
4. 褐色土．粘性なし．締まり弱．褐色土主体層．ローム粒多量
5. 暗黄褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム土主体層．4層覆土・炭化物含む
6. 黄褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム主体層

ピット覆土
1. 褐色土．粘性なし．締まりあり．
ローム粒(10mm以下)多量．ロームブロック(20～30)・炭化物(10mm以下)含む
2. 褐色土．粘性なし．締まりあり．ローム粒・炭化物(10mm以下)含む

第19表　164号住居跡内ピット一覧表

ピット No.	形 状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	標 高 (m)	備　　考
1	楕円形	56	50	105	18.75	

土坑1



土坑1

土坑1覆土
1. 黒色土．粘性なし．締まり強．ローム質．黒色土粒(10mm以下)含む
2. 褐色土．粘性なし．締まり強．ローム質．ローム粒・黒色土粒(10mm以下)含む
3. 暗褐色土．粘性なし．締まり弱．ローム質．ローム土含む
4. 暗褐色土．粘性なし．締まり弱．ローム土＋褐色土
5. 暗黄褐色土．粘性なし．締まり弱．ローム土中にローム粒多量

第37図　164号住居跡（1/80）・土坑１（1/40）

数える。炉体土器・埋甕とも確認されない。覆土中から検出された土器は、加曾利ＥⅠ式またはそれに併行する曾利系統に帰属するものが主体的である。したがって、164号住居跡の帰属時期は加曾利ＥⅠ式期である可能性が高いと考えられる。

【土坑１】調査区のほぼ中央に位置する。長軸約170㎝の楕円形プランを呈し、深さは約70㎝を測る。底面はほぼ平坦で、底部ピットは確認されない。主軸方位はN－50°－Eを指す。遺物は出土していない。形状及び覆土の特徴から、縄文時代の落とし穴と考えられる。詳細な帰属時期は不明である。　（桜井聖悟）

〔**古代以降**〕

古代以降の遺構は、近世の以降と考えられる溝１のみで、最大幅228㎝を測る。一部底面が二股に分かれているが、断面形は双方とも箱薬研形である。立地は調査区北壁寄りに、北に傾斜している斜面の南西～北東方向、すなわち等高線にほぼ平行して延びている。出土遺物は18世紀代の肥前磁器厚手碗１点、瀬戸・美濃陶器皿１点がみられる。

出土遺物全体でも第23表に示したように遺構内外含めて５点と少なく、遺存状態も小破片のみである。よって図示できる遺物はなかった。　（梶原　勝）

第20表　西ノ原遺跡第119地点　出土遺物観察表（1）　縄文土器

〈 〉は残存値，( )は推定値，備考欄の巻頭番号は巻頭図版番号，写番号は写真図版番号

図版番号	掲載番号	遺構名	出土状況	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	遺存部位	器形	地文	文様要素	分類（細分） 6期区分	群	類	型式	備考
38	1	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈15.6〉	上部残存	深鉢	無文	口縁部は広い無文帯、胴部は沈線文列による懸垂文と渦巻文	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	2	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈11.4〉	上部残存	深鉢	無文	口縁部は無文帯、胴上部は刻み付きの隆帯による窓枠状区画、区画内は沈線文列を充填	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	3	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈13.2〉	上部残存	深鉢	撚糸文	口縁部と胴部は隆帯により画される。口縁部文様帯は刻み付き隆帯により区画され、区画内は沈線・刺突を充填	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	4	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈6.4〉	口縁部破片	深鉢	撚糸文	胴部の括れに4本一組の沈線を横走させて胴上部と下部を区画。胴上部に隆帯区画	中期	Ⅲ	?	勝坂Ⅱ～Ⅲ式	写12
	5	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈9.1〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	半截竹管による波状の描線	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	胎土に雲母多量に含む／写12
	6	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.0〉	胴部破片	深鉢	無文	やや太目の半截竹管による、結節した波状の描線	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	7	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈4.2〉	胴部破片	深鉢	不明	刻み・交互刺突文を伴う隆帯及び沈線によるパネル状の区画。区画内には三叉文等を配すると考えられる	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	8	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈4.6〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	指頭圧痕を伴う隆帯による横位区画	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	9	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈9.0〉	胴部破片	深鉢	不明	刻み付き隆帯による、区画内に交互刺突を伴う沈線による渦巻文または同心円文	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	10	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈10.6〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	微隆起線による弧状～楕円形の描線	中期	Ⅷ	－	曾利式系統（加曾利ＥⅠ新式併行期）	写12
	11	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.4〉	胴部破片	浅鉢	無文	沈線による窓枠状区画、区画内に沈線文列・交互刺突文を充填	中期	Ⅲ	?	勝坂式	写12
	12	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.2〉	上部残存	浅鉢	無文	沈線による窓枠状区画、区画内に沈線文列・交互刺突文を充填	中期	Ⅲ	?	勝坂式	写12
	13	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈11.8〉	上部残存	浅鉢	無文	器面が丁寧に研磨される	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
39	14	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.1〉	把手	深鉢	不明	隆帯上に爪形の刻み・斜位の円形刺突	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	15	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.2〉	把手	深鉢	不明	沈線を伴う隆帯によって中空把手が形成される	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12
	16	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.0〉	把手	深鉢	不明	隆帯上に爪形の刻み	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写12
	17a・b	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈13.0〉	胴部破片	キャリパー形深鉢	撚糸文	微隆起線による口縁部区画・胴部横位区画	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12
	18	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.5〉	口縁部破片	深鉢	撚糸文	浅い沈線により狭い口縁部無文帯を区画	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12
	19	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈8.4〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	細い沈線による横位区画	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12
	20	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈8.2〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	沈線による横位区画・幾何学的な描線	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12
	21	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈8.7〉	－	深鉢	撚糸文	半截竹管線による横位区画・弧状文	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利ＥⅠ古式	写12

図版番号	掲載番号	遺構名	出土状況	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	遺存部位	器形	地文	文様要素	分類（細分） 6期区分	群	類	型式	備考
39	22	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈8.4〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	2～3本一組の半截竹管線による横位区画・横位連結文	中期	Ⅴ	2	加曾利EⅠ古式	写12
	23	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈9.6〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	撚糸文	口縁部文様帯は横位施文の撚糸文地文に、2本一組の隆帯による横S字文。頸部無文帯は無い。胴部は縦位施文の撚糸文を地文とする	中期	Ⅴ	2	加曾利EⅠ古式	写13
	24	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈6.7〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	撚糸文	口縁部文様帯は横位施文の撚糸文地文に、2本一組の隆帯による横S字文＋渦巻文。頸部無文帯は無い。胴部は縦位施文の撚糸文を地文とする	中期	Ⅴ	2	加曾利EⅠ古式	写13
	25	162号住居跡	P4内一括	不明	不明	〈6.2〉	－	深鉢	撚糸文	ゆるい波状口縁で、口唇直下を狭い無文帯とする	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利EⅠ古式	写13
	26	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.2〉	口縁部破片	深鉢	撚糸文	波状口縁。口唇は肥圧し、上面に沈線を入れる。口唇直下を狭い無文帯とする	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利EⅠ古式	写13
	27	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.2〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	不明	口縁部文様帯は、隆帯と沈線により乳頭状に突出した渦巻文を配する。頸部無文帯を有する	中期	Ⅴ	2～3	加曾利EⅠ式併行期	北西関東丘陵系 写13
	28	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.2〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	撚糸文	口縁部文様帯は横位施文の撚糸文地文に、隆帯による渦巻文等を配する。頸部無文帯を有する	中期	Ⅴ	3	加曾利EⅠ新式	写13
	29	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈5.9〉	胴部破片	浅鉢	無文	胴上部に隆帯による渦巻文	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利EⅠ古式	写13
40	30	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.2〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	不明	蛇体装飾。口縁部文様帯に隆帯と沈線による乳頭状に突出した渦巻文を配し、その下に隆帯の頭部を連結してトグロを巻いた蛇を表現する	中期	Ⅴ	2	加曾利EⅠ式併行期	北西関東丘陵系 写13
	31	162号住居跡	覆土	不明	7.0	〈19.3〉	下部残存	深鉢	縄文	胴部に縄文地文のみ	中期	Ⅴ	2～3	加曾利EⅠ式	写13
	32a・b	162号住居跡	覆土	不明	9.7	〈25.4〉	下部残存	深鉢	撚糸文	隆帯により頸部と胴部を区画し、胴部に隆帯による直下懸垂文を配する	中期	Ⅴ	1～2	「加曾利E直前」段階～加曾利EⅠ古式	写13
	33	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.0〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	隆帯による口縁部文様、胴部には半截竹管線による横位の波状文	中期	Ⅴ	2～3	加曾利EⅠ式	写13
	34	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈4.1〉	胴部破片	深鉢	撚糸文	2本一組の半截竹管線による弧状の描線（横位S字文？）	中期	Ⅴ	2～3	加曾利EⅠ式	写13
	35	162号住居跡	覆土	不明	不明	〈2.7〉	―	台付土器または器台	不明	側面に孔	中期	？	－	不明	写13
	36	163号住居跡	炉体土器	42.0	不明	〈14.0〉	上部残存～中部残存	浅鉢	無文	口縁部は無文帯。胴上部の文様帯を縦位沈線で6区画の長方形区画に分割。区画内は沈線による隅丸長方形が描かれ、交互刺突や刻みにより加飾される	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	巻頭6、写13
	37	163号住居跡	埋甕	22.0	不明	〈13.5〉	上部残存	キャリパー形深鉢	撚糸文	4単位の波状口縁。高い環状把手と波頭に取り憑く中空の隆帯が交互に2つずつ作られる。口縁部文様帯は横位～斜位施文の撚糸文地文に、2本一組の隆帯による、先端が渦巻状になる横S字状文を配する。頸部無文帯を有し、頸部と胴部は隆帯によって画される	中期	Ⅴ	3	加曾利EⅠ新式古相	巻頭6、写13
41	38	163号住居跡	覆土下層	16.0	4.6	23.7	準完形	円筒形深鉢	複節縄文	口唇直下に隆帯が横走	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	巻頭6、写14
	39	163号住居跡	覆土	(16.2)	不明	〈10.0〉	上部残存	円筒形深鉢	撚糸文	沈線＋微隆起線＋交互刺突文により口縁部と胴部を区画する。口縁部は無文帯とし、胴部は縦位施文の撚糸地文。口縁部から胴部にかけて、一部刻みを伴う隆帯＋沈線による、渦巻形を含んだ抽象文的な装飾が配される	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写14
	40	163号住居跡	覆土	不明	(10.7)	〈14.6〉	下部残存	深鉢	撚糸文	2本一組の隆帯による直下懸垂文・弧状文等	中期	Ⅷ	－	曾利式系統（加曾利EⅠ式併行期）	写14
	41	163号住居跡	覆土	39.2	不明	〈16.3〉	上部残存	浅鉢	無文	器面が丁寧に研磨される	中期	Ⅲ	2	勝坂Ⅲ式	写14
	42	163号住居跡	覆土	(28.0)	不明	〈11.0〉	上部残存	キャリパー形深鉢	撚糸文	口縁部・胴部とも縦位の撚糸文地文。口縁部文様帯は、2本一組の隆帯による半月形・三角形区画が配され、隆帯の端は渦巻文となる。頸部無文帯は無い。胴部は1本の隆帯による直下懸垂文が配される	中期	Ⅴ	2	加曾利EⅠ古式	写14
	43a・b	163号住居跡	覆土	(34.0)	不明	〈12.4〉	上部残存	キャリパー形深鉢	縄文	口縁部文様帯は、2本一組の微隆起線と沈線による半月形区画が配され、区画の境は隆帯による突出した渦巻文となる。頸部は微隆起線により口縁部・胴部と明確に画されるが、無文帯とはならない	中期	Ⅴ	3	加曾利EⅠ新式古相	写14

図版番号	掲載番号	遺構名	出土状況	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	遺存部位	器形	地文	文様要素	分類（細分） 6期区分	群	類	型式	備考
42	44a・b	163号住居跡	覆土	(27.8)	不明	〈13.8〉	上部残存	キャリパー形深鉢	撚糸文	口縁部文様帯は2本一組の微隆起線と沈線による隅丸長方形（一部2段となる）・半月形等の区画が配され、微隆起線の端は隆帯になる突出した渦巻文となる。頸部無文帯を有する	中期	V	3	加曾利EⅠ新式古相	写14
	45	163号住居跡	覆土	(37.0)	不明	〈19.2〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	縄文	ゆるい波状口縁。口縁部文様帯は隆帯により半月形・三角形区画が配され、隆帯の端は波頭に取り悪く中空の把手となる	中期	V	3	加曾利EⅠ新式古相	写14
	46	163号住居跡	覆土	(34.0)	不明	〈10.0〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	縄文	口縁部文様帯は、2本一組の微隆起線＋沈線により半月形・三角形区画が配され、区画の境はゆるい渦巻文。頸部無文帯を有する	中期	V	3	加曾利EⅠ新式中相	写14
	47	163号住居跡	覆土	(26.3)	不明	〈9.0〉	口縁部破片	キャリパー形深鉢	撚糸文	隆帯による区画、渦巻形を含む中空把手	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写14
	48	163号住居跡	覆土	不明	(14.8)	〈9.4〉	下部残存	深鉢	撚糸文	半截竹管線による直下懸垂文	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写14
	49	163号住居跡	覆土	不明	10.0	〈3.5〉	底部破片	深鉢	縄文	2本一組の微隆起線＋沈線による直下懸垂文、隆帯による蛇行懸垂文	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写14
	50	163号住居跡	覆土	不明	9.6	〈4.4〉	底部破片	深鉢	撚糸文	縦位施文の撚糸文地文のみ	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写14
	51	163号住居跡	覆土	不明	10.0	〈4.4〉	底部破片	深鉢	撚糸文	縦位施文の撚糸文地文のみ	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写14
	52	163号住居跡	覆土	(46.2)	不明	〈11.0〉	上部残存	浅鉢	不明	口縁部は無文帯。胴上部は、口縁部との境から延長された隆帯が渦巻形の突起となって配され、その間に縦位沈線列・沈線＋刺突文列による渦巻文等が充填される	中期	V	2	加曾利EⅠ古式	写15
	53	163号住居跡	覆土	(42.3)	不明	〈16.3〉	上部残存	浅鉢	無文	口縁部は無文帯。胴上部は2本一組の微隆起線＋沈線による半月形・三角形区画が配され、区画内には微隆起線による渦巻文・縦位沈線列が充填される	中期	V	3	加曾利EⅠ新式	写15
43	54	163号住居跡	覆土	不明	不明	〈7.8〉	胴部破片	浅鉢	無文	2～3本一組の沈線による隅丸長方形区画。区画内・区悪の隙間は縦位沈線列が充填される	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写15
	55	163号住居跡	覆土	不明	8.4	〈11.2〉	下部残存	浅鉢	撚糸文	胴上部に隆帯による半月形（？）区画を配し、区画内の一部に隆帯による蛇行懸垂文が配される。胴下部～底部は無文	中期	V	2～3	加曾利EⅠ式	写15
	56a・b	163号住居跡	覆土	不明	不明	〈13.0〉	中部残存	浅鉢	無文	肩部に一部刻みが付く	中期	?	－	勝坂Ⅲ式～加曾利EⅠ式？	写15
	57	163号住居跡	覆土	(24.0)	不明	〈14.3〉	上部残存	深鉢	条線	口縁部はラッパ状に開き広い無文帯となる。頸部～胴部は縦位の撚糸文地文。口縁部と頸部は半截竹管線、頸部と胴部は貼付隆帯により画される。頸部には斜位の隆帯が連続して貼り付けられ、胴部には隆帯よる蛇行懸垂文が配される	中期	Ⅷ	－	曾利Ⅱ～Ⅲ式	写15
	58	164号住居跡	覆土	不明	(9.7)	〈19.0〉	下部残存	深鉢	撚糸文	隆帯による蛇行懸垂文	中期	Ⅷ	－	曾利式系統（加曾利EⅠ式併行期）	写15

第21表　西ノ原遺跡第119地点　出土遺物観察表 (2)　縄文土製品

備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	掲載番号	遺構名	分類	直径(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	素材土器の型式	残存度(%)	縁辺スレ	備考
43	59	162号住居跡	土製円板	2.7	1.1	9.1	中期	100	30%	写15
	60	163号住居跡	土製円板	3.5	1.0	14.6	加曾利E式	100	50%	写15
	61	163号住居跡	土製円板	3.8	1.0	16.9	中期	100	50%	表面大きく剥離／写15
	62	163号住居跡	土製円板	2.8	0.9	9.4	加曾利EⅠ式	100	30%	写15
	63	163号住居跡	土製円板	2.8	1.0	7.7	中期	100	30%	写15
	64	163号住居跡	土製円板	3.0	1.1	11.1	中期	100	ナシ	写15

第22表　西ノ原遺跡第119地点　出土遺物観察表 (3)　縄文石器

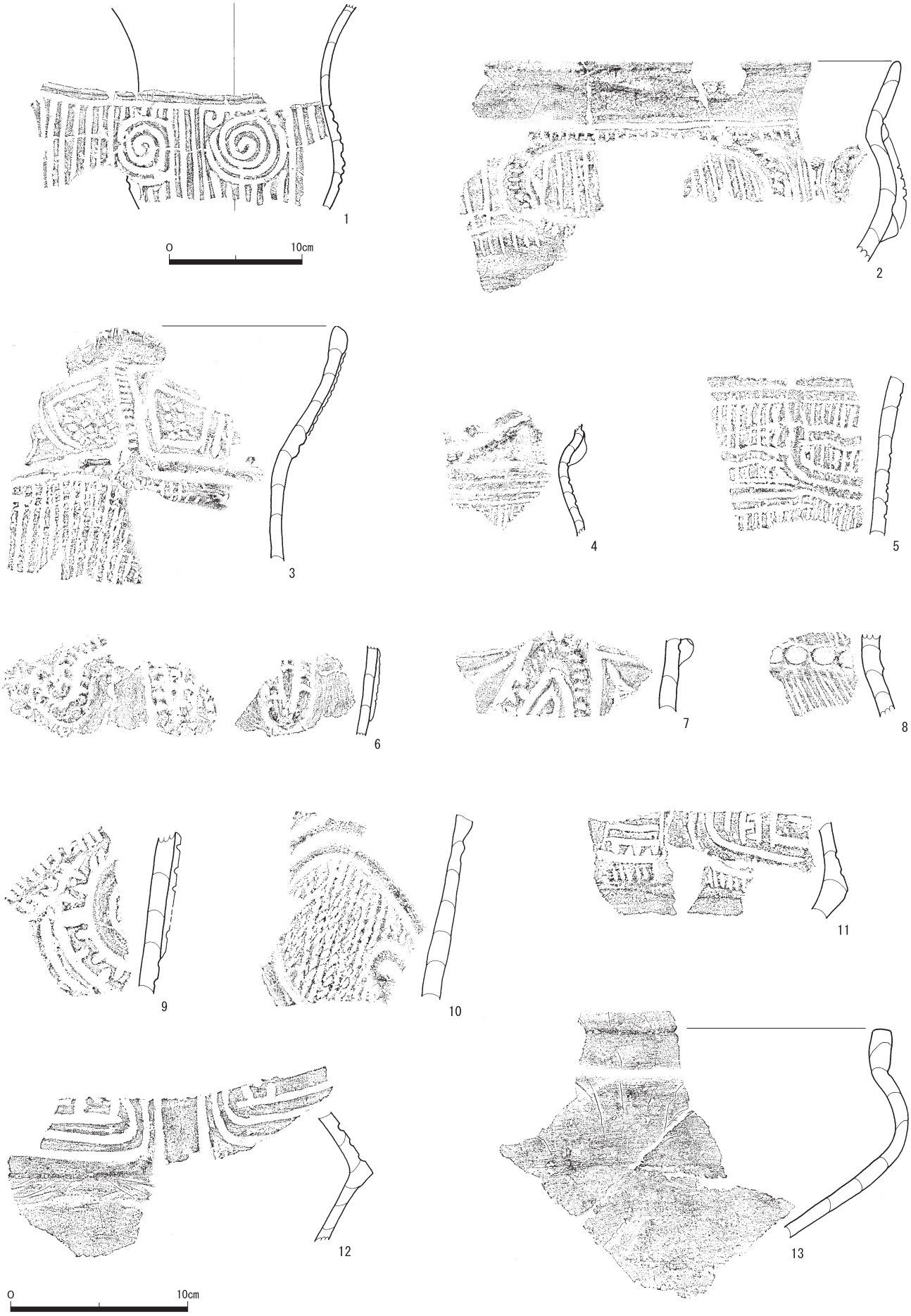
〈 〉は残存値，備考欄の写番号は写真図版番号

図版番号	掲載番号	遺構名	分類 器種	群	類	石材	遺存部位	長/高 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
44	65	163号住居跡	石鏃	Ⅰ	－	黒曜石	A	2.1	1.6	0.5	1.0	写16
	66	163号住居跡	石匙	Ⅱ	1	砂岩	A	5.0	8.9	1.1	38.8	写16
	67	162号住居跡	石匙	Ⅰ	1	頁岩	D	〈8.2〉	〈6.3〉	〈1.0〉	〈44.1〉	写16
	68	163号住居跡	スクレーパー	Ⅰ	－	ホルンフェルス	E	〈4.6〉	〈6.8〉	〈1.4〉	〈37.2〉	写16
	69	163号住居跡	スクレーパー	Ⅲ	－	頁岩	A	3.3	4.1	1.3	18.1	写16
	70	163号住居跡	スクレーパー	Ⅰ	－	ホルンフェルス	A	6.2	9.1	2.2	113.2	写16
	71	溝1	スクレーパー	Ⅰ	－	ホルンフェルス	A	3.7	9.9	1.5	57.1	写16
	72	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	1	砂岩	A	9.4	4.0	1.9	89.0	写16
	73	162号住居跡P4	打製石斧	Ⅰ	1	結晶片岩	A	14.3	4.5	1.2	111.9	写16
	74	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	2	砂岩	A	9.1	4.0	1.8	69.5	写16
	75	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	3	ホルンフェルス	A	12.9	4.7	2.3	155.4	写16
	76	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	5	ホルンフェルス	A	7.3	4.2	0.9	39.7	写16
	77	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	6	砂岩	A	11.7	4.3	1.3	79.2	写16
45	78	162号住居跡	打製石斧	Ⅰ	6	緑泥片岩	B1	〈11.3〉	4.4	1.3	〈80.8〉	写16
	79	162号住居跡	打製石斧	Ⅱ	1	ホルンフェルス	A	7.7	6.8	1.9	113.8	写16
	80	162号住居跡P4	打製石斧	Ⅱ	2	ホルンフェルス	A	7.8	5.0	1.3	54.1	写16
	81	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	1	頁岩	A	7.0	3.6	1.1	35.6	写16
	82	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	1	凝灰岩？	A	10.5	4.1	1.8	95.8	写16
	83	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	3	ホルンフェルス	A	9.9	4.7	1.8	98.9	写16
	84	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	3	頁岩	B1	〈10.7〉	〈4.2〉	〈1.6〉	〈78.1〉	写17
	85	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	3	頁岩	B1	〈10.0〉	〈3.8〉	〈1.4〉	〈56.2〉	写17
	86	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	3	ホルンフェルス	A	9.4	5.0	2.0	102.6	写17
	87	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	5	頁岩	A	9.6	4.3	1.4	59.6	写17
	88	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	5	緑色片岩	C2	〈8.1〉	〈6.5〉	〈1.9〉	〈110.4〉	写17
	89	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	6	頁岩	A	9.4	3.9	1.8	82.1	写17
46	90	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	6	砂岩	B1	〈8.0〉	〈4.4〉	〈2.1〉	〈81.0〉	写17
	91	163号住居跡	打製石斧	Ⅰ	6	ホルンフェルス	B1	〈11.2〉	〈4.9〉	〈2.1〉	〈104.0〉	写17
	92	163号住居跡	打製石斧	Ⅳ	2	ホルンフェルス	B2	〈8.5〉	〈5.2〉	〈3.0〉	〈142.9〉	写17
	93	164号住居跡	打製石斧	Ⅰ	2	凝灰岩	B1	〈14.7〉	5.2	2.1	〈162.0〉	写17
	94	164号住居跡	打製石斧	Ⅰ	5	頁岩	A	10.2	5.9	1.8	81.9	写17
	95	溝1	打製石斧	Ⅰ	1	凝灰岩	A	10.9	4.0	1.5	89.4	写17
	96	溝1	打製石斧	Ⅰ	1	ホルンフェルス	A	10.0	6.3	1.2	58.2	写17
	97	溝1	打製石斧	Ⅰ	3	ホルンフェルス	A	7.1	4.7	1.9	78.1	写17
	98	溝1	打製石斧	？	－	ホルンフェルス	C2	〈4.9〉	〈5.8〉	〈2.0〉	〈62.3〉	写17
	99	162号住居跡	敲石	Ⅱ	－	凝灰岩	B1	〈10.3〉	4.7	2.3	〈180.5〉	磨製石斧－Ⅰ群の可能性もある 写17
	100	162号住居跡	敲石	Ⅱ	－	砂岩	A	12.7	4.4	3.0	323.1	磨製石斧－Ⅰ群の可能性もある 写17
	101	163号住居跡	敲石	Ⅰ	－	砂岩	A	9.9	4.9	2.2	136.0	写17
	102	163号住居跡	石錘	Ⅱ	2	砂岩	A	5.1	7.6	3.7	115.1	写17

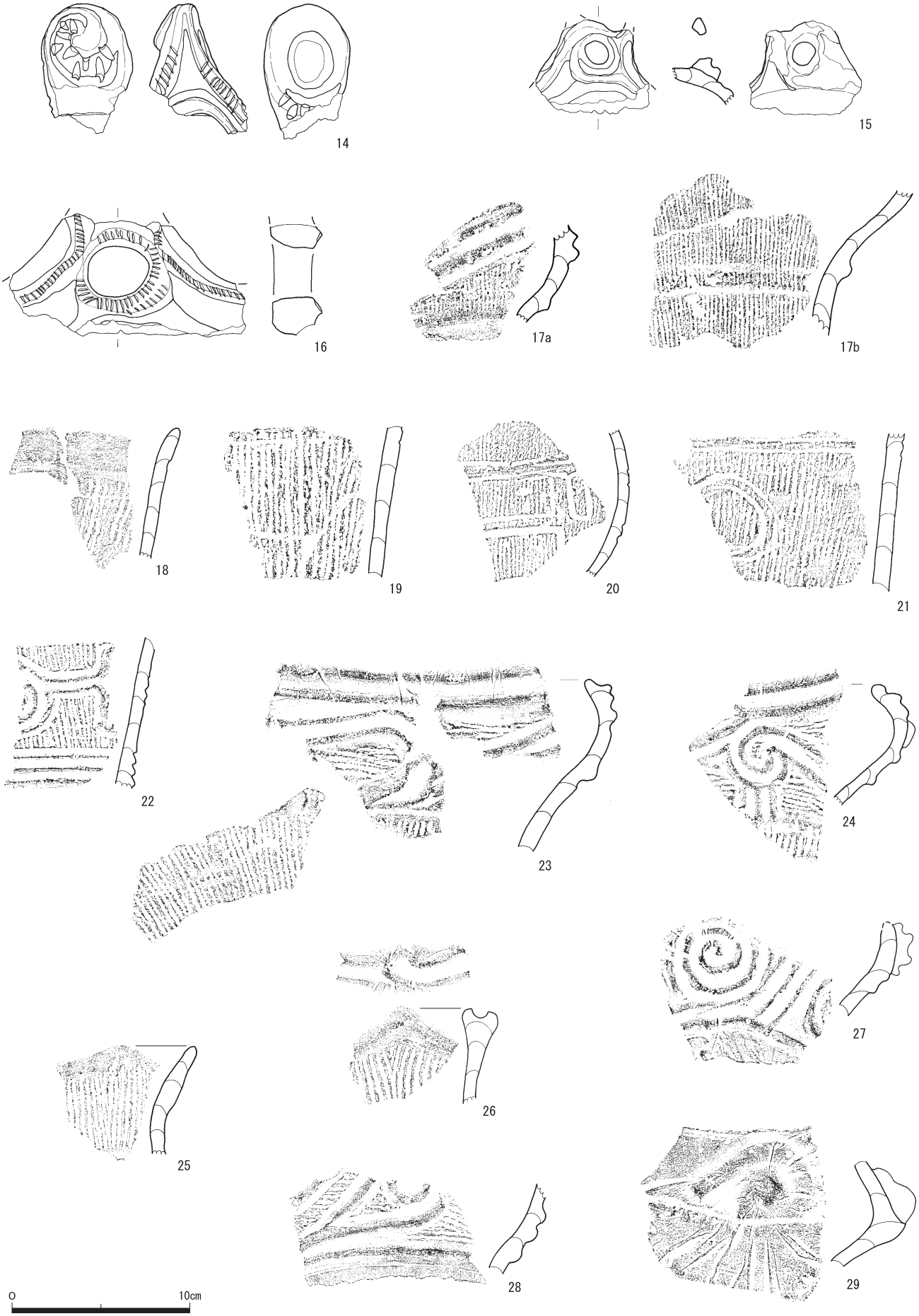
第23表　西ノ原遺跡第119地点　出土遺物集計表　古代以降

種別	数	器種	数	細分名	数
磁器	3	碗	1	厚手碗	1
		小坏	1		
		仏飯具	1		

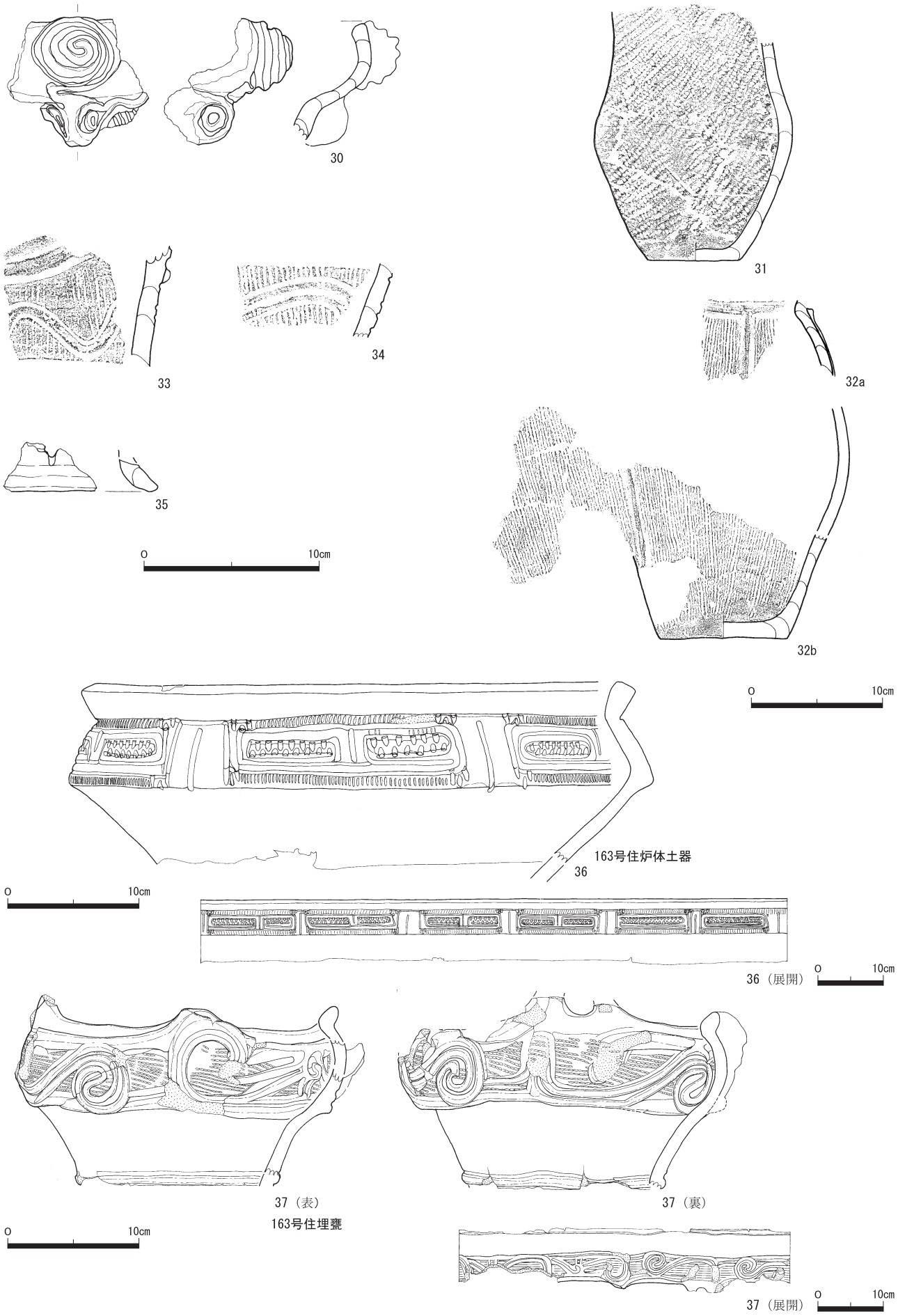
種別	数	器種	数	細分名	数
陶器	1	皿	1		
須恵器	1	大甕	1		
合　計	5				



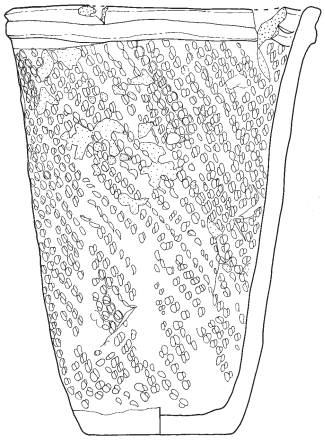
第38図　出土遺物（1）　縄文土器①（1/3，1/4）

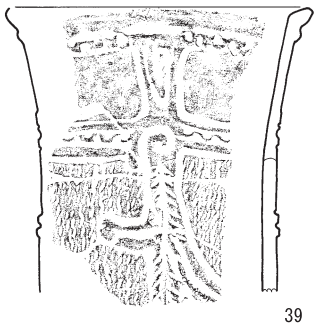


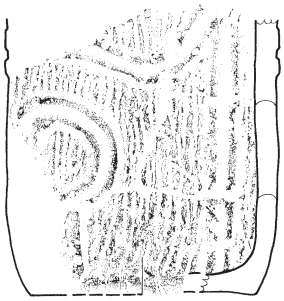
第39図　出土遺物（2）　縄文土器②（1/3）

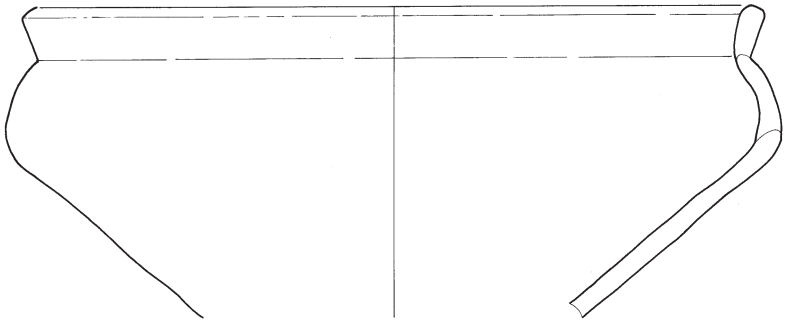


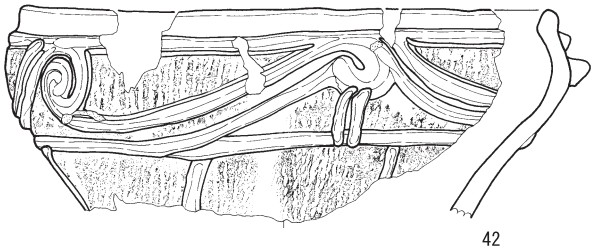
第40図　出土遺物 (3)　縄文土器③（1/3，1/4，1/8）


38


39


40


41

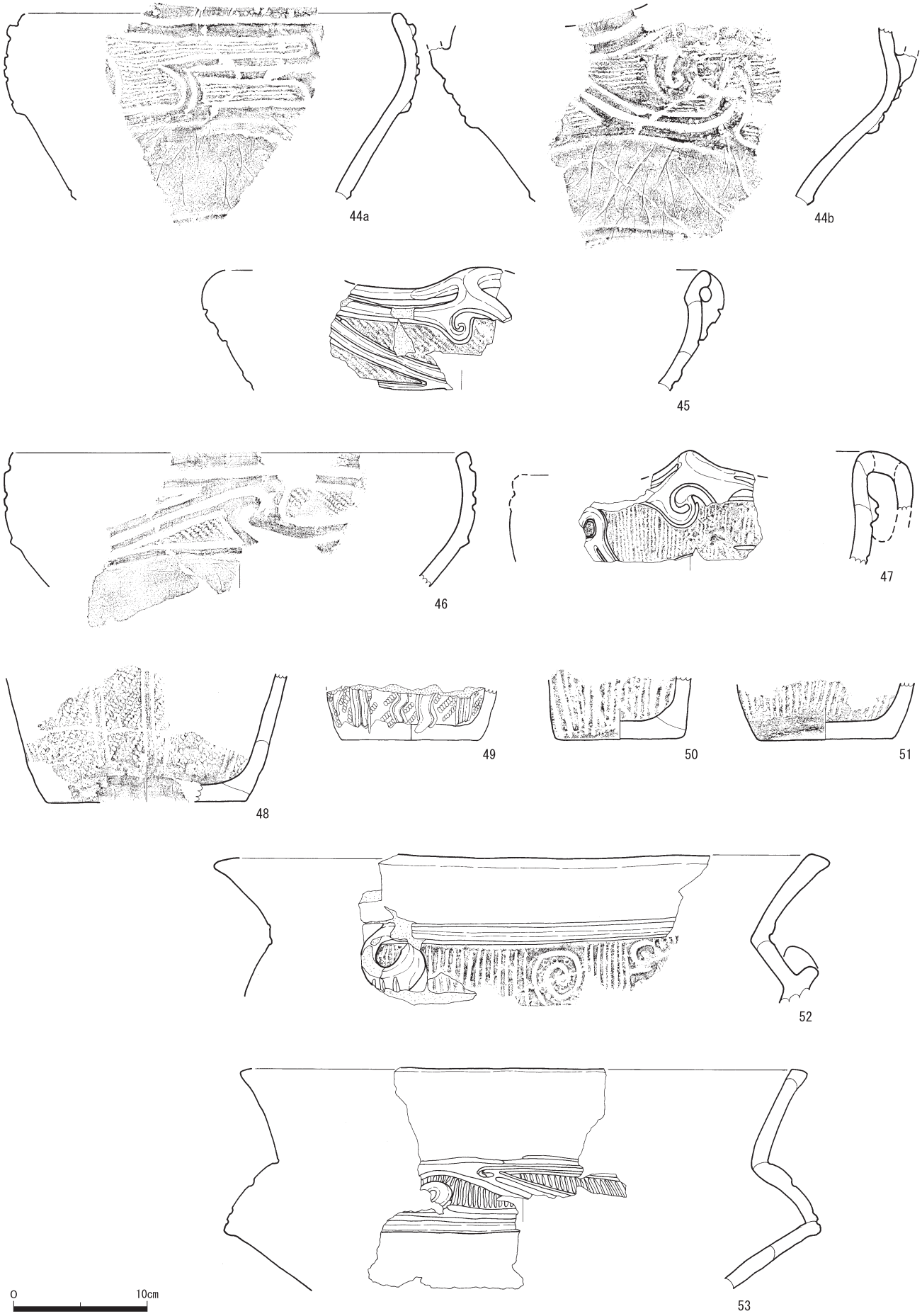

42

43a

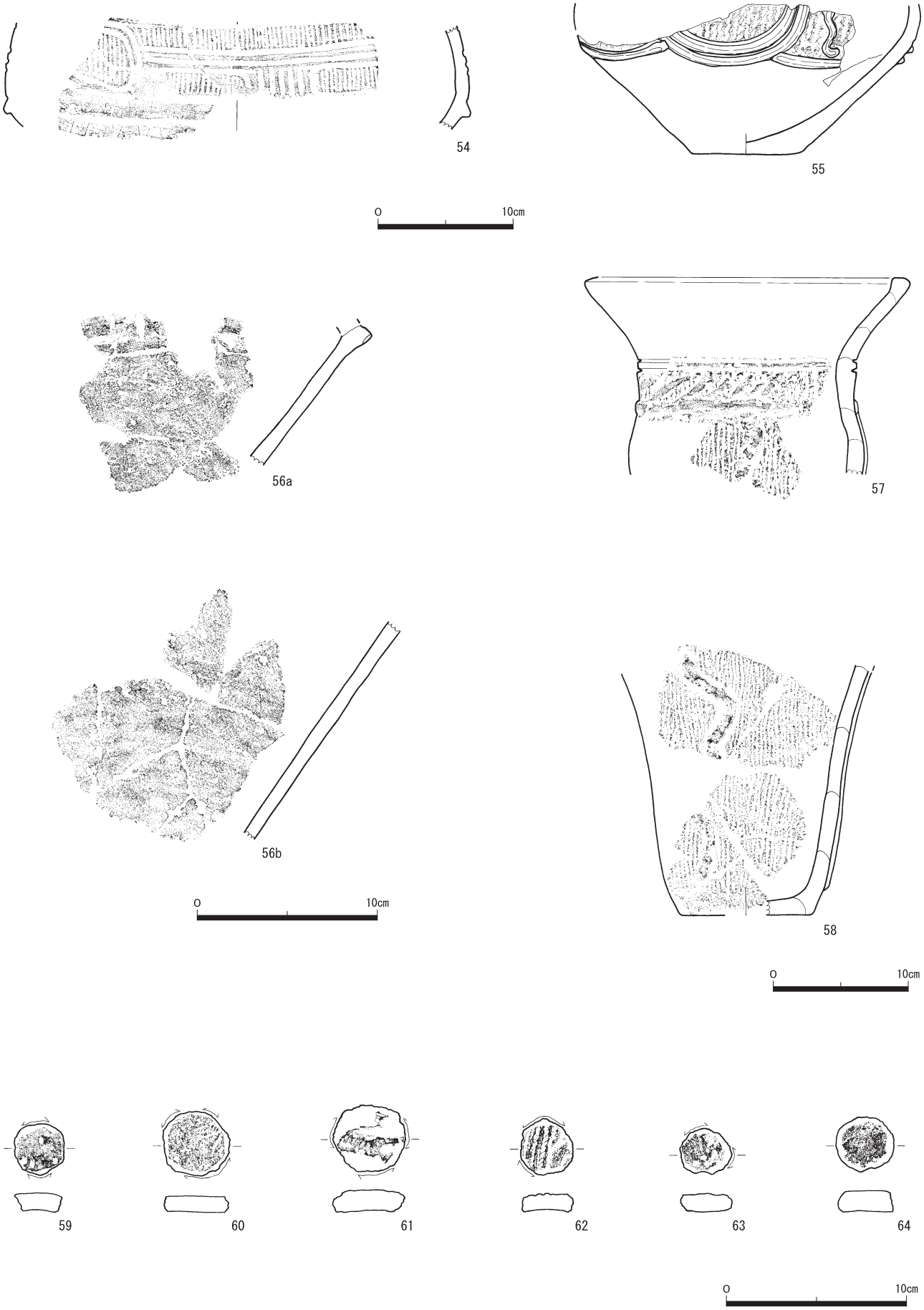
43b

0　10cm

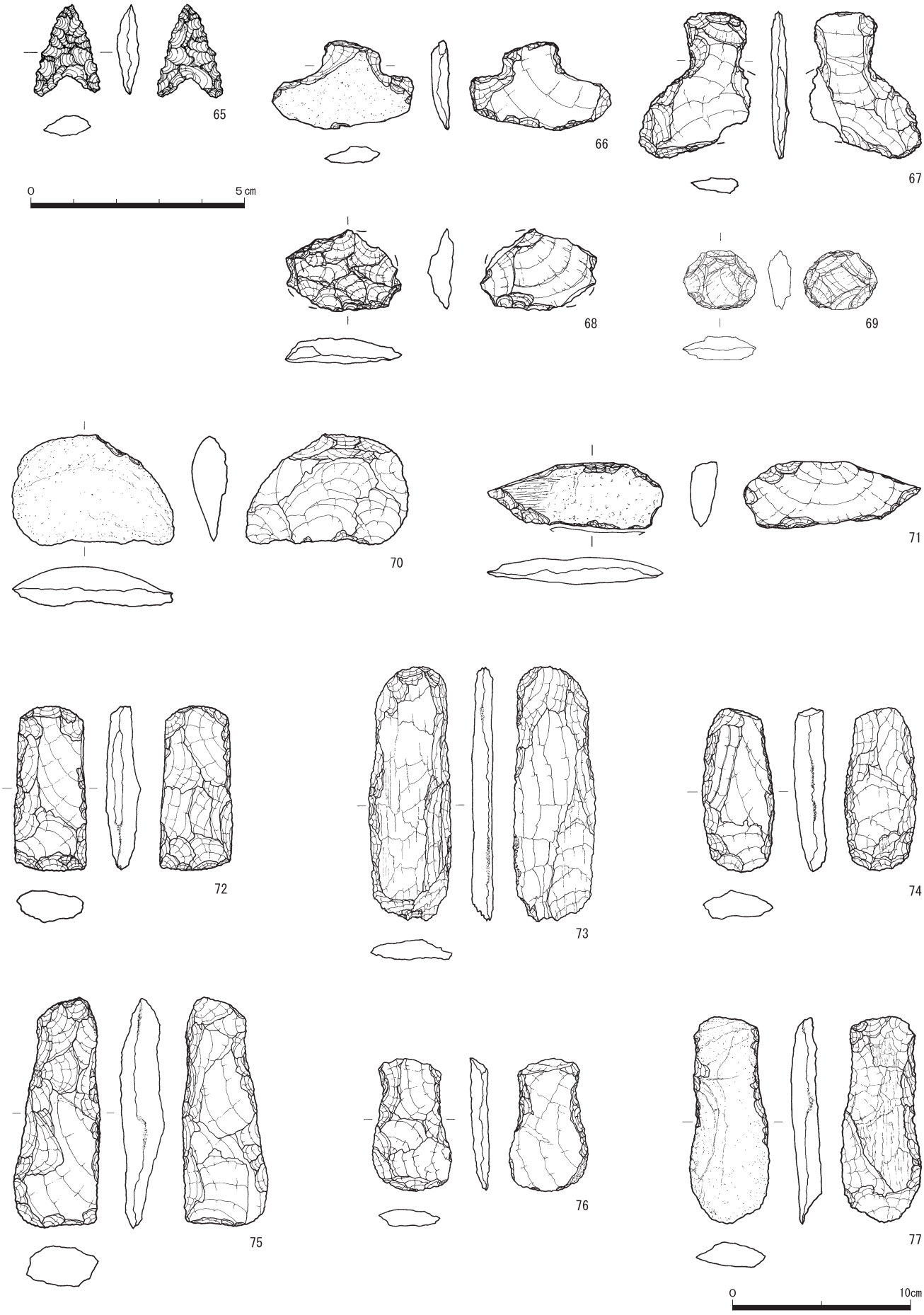
第41図　出土遺物 (4)　縄文土器④（1/4）



第42図　出土遺物 (5)　縄文土器⑤ (1/4)



第43図　出土遺物 (6)　縄文土器⑥・土製品（1/3，1/4）



第44図　出土遺物（7）　縄文石器①（1/3，4/5）

第45図　出土遺物 (8)　縄文石器②（1/3）

第46図　出土遺物 (9)　縄文石器③（1/3）

（３）163号住居跡の埋甕内容物に関する調査

はじめに

西ノ原遺跡は、さかい川右岸に位置し、低位段丘上に立地する。これまでの調査により旧石器時代以降の遺構・遺物が検出されており、特に縄文時代中期には環状集落が形成していたことが判明している。今回は、第119地点の163号住居跡から出土した埋甕の内容物（ヒトをはじめとする動物遺体）の有無を検討するために、自然科学分析調査を実施する。分析項目として、動物遺体に多く含有されるリン酸成分および骨に多量に含まれるカルシウム成分を測定するリン・カルシウム分析を選択する。また、動物遺体に由来する脂肪酸が残留しているか否かを調べるために、脂肪酸分析も併せて行う。

１．試料

163号住居跡では、縄文時代中期（加曾利ＥⅠ新の古相）の炉内埋設土器および埋甕が検出されている。埋甕は、住居の南端に埋設され、底部を抜かれて、口縁部を上位にした正位の状態にあった。埋甕では、内部の覆土の上位（１層：サンプル２）と下位（２層：サンプル３）から試料を採取した。また、土器本体へ動物遺体成分が浸透、残留している可能性を考慮し、土器本体（サンプル４）も試料とした。これらの対照試料として、住居内覆土の最下層（３層：サンプル１）も採取された。これらの試料の中で、リン・カルシウム分析に土壌試料３点、脂肪酸分析に４点全点を用いた（第24表）。

第24表　西ノ原遺跡163号住居跡埋甕の分析試料

ｻﾝﾌﾟﾙ名	採取位置	分析項目	
		リンカル	脂肪酸
1	住居跡覆土3層	●	●
2	埋甕覆土1層	●	●
3	埋甕覆土2層	●	●
4	埋甕(胎土)		●

２．分析方法

ａ．リン・カルシウム分析

測定は土壌養分測定法委員会（1981）などを参考に、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った。以下に、各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させ、風乾細土試料とする。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）で測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸（P2O5）濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取して、干渉抑制剤を加え、原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5㎎／g）とカルシウム含量（CaOmg／g）を求める。

ｂ．脂肪酸分析

分析は、坂井ほか（1996）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。

試料が浸るのに十分なクロロホルム：メタノール（２：１）を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステルとステロールを分離する。

脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON，HR－SS－10，内径0.25㎜、長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（GC－14A，SHIMADZU）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。

ステロールの分析では、キャピラリーカラム（J&WSCIENFIC，DB－1，内径0.36m、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

３．結果

ａ．リン・カルシウム分析

結果を第25表に示す。

第25表　163号住居跡埋甕のリン・カルシウム分析結果

ｻﾝﾌﾟﾙ名	遺構名	土性	土色		P205 (mg/g)	CaO (mg/g)
1	住居跡覆土3層	CL	10YR3/2	黒褐	2.98	3.7
2	埋甕覆土1層	CL	10YR3/2	黒褐	3.28	3.73
3	埋甕覆土2層	C	10YR3/2	黒褐	2.75	3.27

注(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖
（農林省農林水産技術会議監修、1967)による。
(2)土性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。
L：壌土(粘土0～15%、シルト20～45%、砂40～65%)
CL：埴壌土(粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%)

試料の土性は壌土～埴壌土であり、シルト・砂分が多い。土色は黒褐色を呈し、腐植含量の高いことがうかがえる。

リン酸・カルシウム含量は、対照試料としたサンプル1（住居跡覆土３層）、サンプル２（埋甕覆土１層）、サンプル３（埋甕覆土２層）でほぼ同量であり、顕著な差は認められない。

ｂ．脂肪酸分析

結果を第47図に示す。

ステロールはサンプル１（住居跡覆土３層）・３（埋甕覆土２層）では全く検出されず、サンプル２（埋甕覆土１層）・４（埋甕胎土）においても非常に少ない。ただし、サンプル２・４では、全てが動物由来のコレステロールである。

脂肪酸分析では、いずれの試料においても主体となる脂肪酸は類似する。すなわち、パルチミン酸（C16）、オレイン酸（C18：１）の割合が高く、ミリスチン酸（C14）、ステアリン酸（C18）が10％程度検出される。サンプル１～３ではこれ以外の脂肪酸はほとんど検出されないが、サンプル４では他の試料とは異なりリグノセリン酸（C24）が10％程度、アラキジン酸（C20）、ベヘン酸（C22）、エルカ酸（C22：１cis）、ドコサヘキサエン酸（DHA）が微量検出される。

４．考察

リン酸の土壌中に含まれる量、いわゆる天然賦存量に関しては幾つかの調査例がある（Bowen，1983；Bolt・Bruggenwert、1980；川崎ほか、1991；天野ほか、1991）。これらの調査例からリン酸の天然賦存量の上限は、約3.0P2O５㎎／g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P2O5㎎／gとの報告もある（川崎ほか、1991）。さらに、当社での分析例では骨片などの痕跡が認められる土壌で6.0P2O5㎎／gを越える場合が多い。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP2O5㎎／gで統一した。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。また、カルシウムの天然賦存量は普通１～50CaO㎎／g（藤貫、1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きいことが知られている。

今回の測定結果では、埋甕覆土および埋甕胎土、対照試料とした住居跡覆土３層を含めて、リン酸・カルシウム成分が天然賦存量の範囲に相当するため、これらが埋甕内に富化されているとは言えない。試料の土色からは、土壌中に植物に由来する腐植が比較的多く含まれていたことが示唆される。したがって、土壌中のリン酸やカルシウムは主に植物遺体によって供給されたと考えられる。

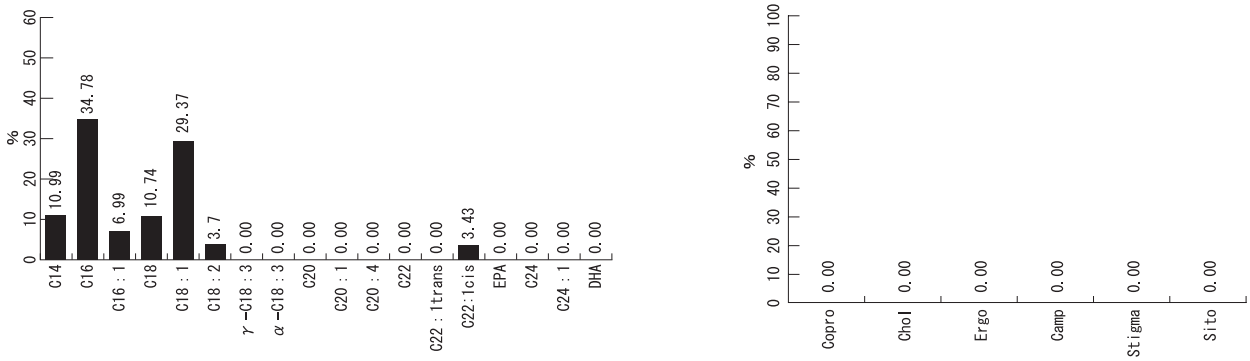
一方、脂肪酸分析結果では、埋甕覆土と埋甕胎土で脂肪酸組成がやや異なる。各試料に共通していることは、パルチミン酸（C16）、ステアリン酸（C18）、オレイン酸（C18：１）などを主体としていることである。これらの脂肪酸は、動物油や植物油に多く含まれる成分である（島薗、1988）。また分子量の大きい脂肪酸や不飽和脂肪酸は分解されやすいため、分子量の小さい脂肪酸や不飽和脂肪酸の量比が高くなっていると考えられる。

ところが、埋甕胎土では微量ではあるが、分子量の大きい脂肪酸が検出される点で埋甕覆土とは異なっている。検出されるアラキジン酸（C20）は動物リン脂質の一種で、生体膜の構成成分として重要である（島薗、1988）。アラキジン酸（C20）のほか、ベヘン酸（C22）、リグノセリン酸（C24）は高等動物の脳に多く含まれる脂肪酸（中野、1995）であると言われており、少量検出されているエルカ酸（C22：１cis）やドコサエキサエン酸（DHA）も動物（特に魚介類）に含まれる。さらにステロール組成をみると、検出量は非常に少なかったものの、埋甕胎土および埋甕覆土１層では動物由来のコレステロールの量比が非常に高い。

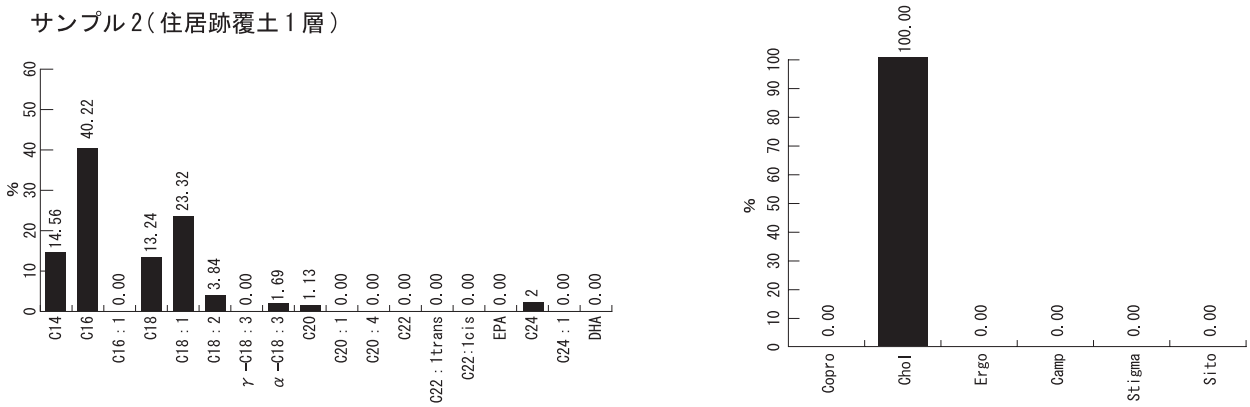
以上のことにより、埋甕胎土中には動物質の脂肪酸が残留していると考えられる。したがって、埋甕内にヒトをはじめとした動物遺体が存在した可能性がある。埋甕覆土に痕跡が残っていなかった点は、覆土中に化学成分の保持能力が高い粘土分が少なく、たとえ遺体が存在していたとしても遺体成分が残留しにくかったことが考えられる。

今回、埋甕覆土とともに土器胎土を分析試料とすることで、土器内に動物遺体が存在した可能性があることを推定できた。今後も同様な検出例について、覆土と土器胎土を対象とし複数の分析手法を用いることにより、土器の用途や祭祀などについての調査を行っていきたいと考える。

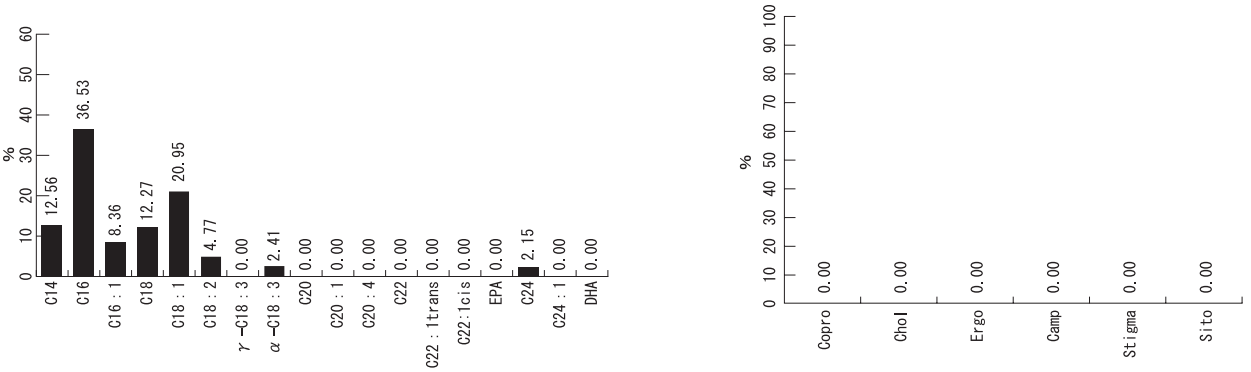
サンプル1（住居跡覆土3層）



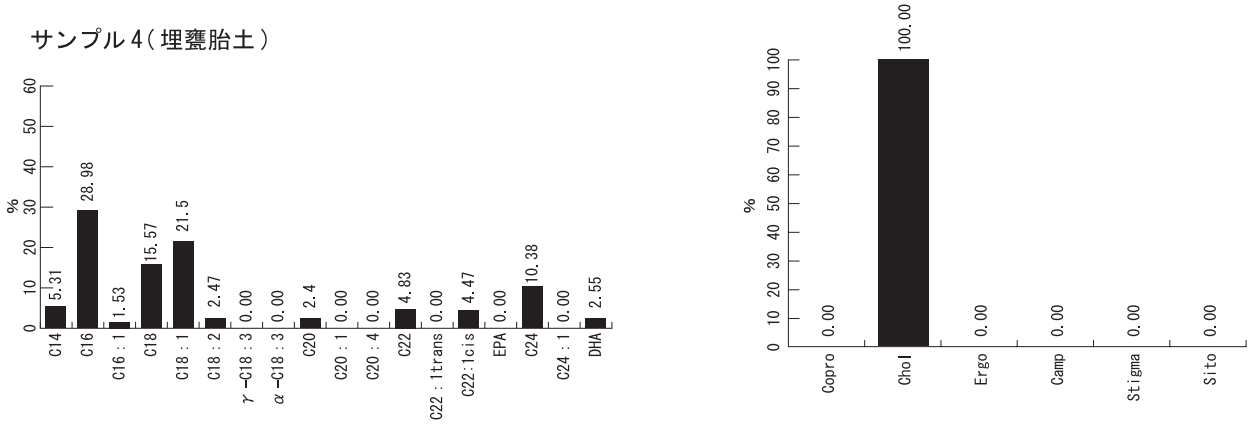
サンプル2（住居跡覆土1層）



サンプル3（埋甕覆土2層）



サンプル4（埋甕胎土）

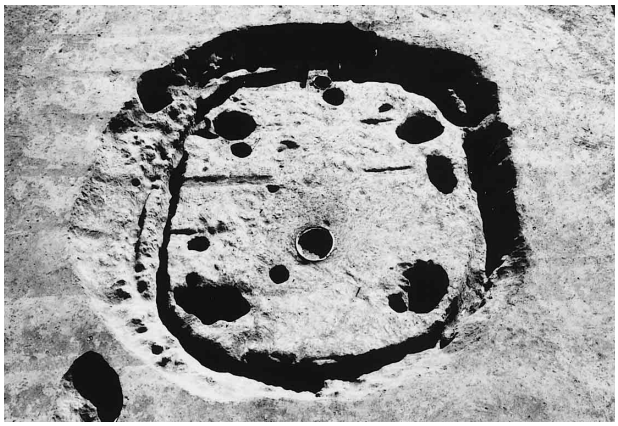


第47図　163号住居跡埋甕の脂肪酸・ステロール組成

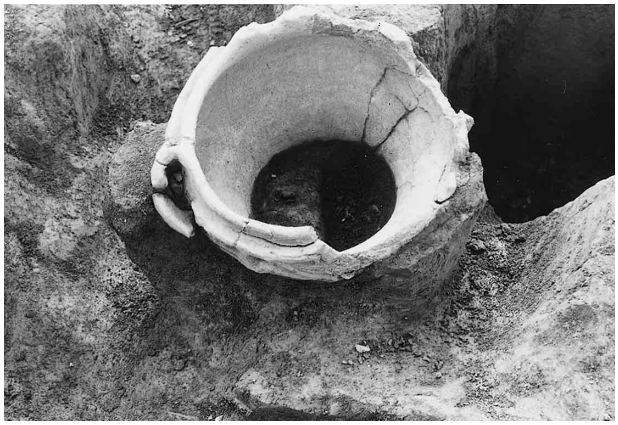
西ノ原遺跡第119地点　調査区全景

西ノ原遺跡第119地点　162号住居跡

西ノ原遺跡第119地点　162号住居跡　炉１・２　検出状況


西ノ原遺跡第119地点　163号住居跡

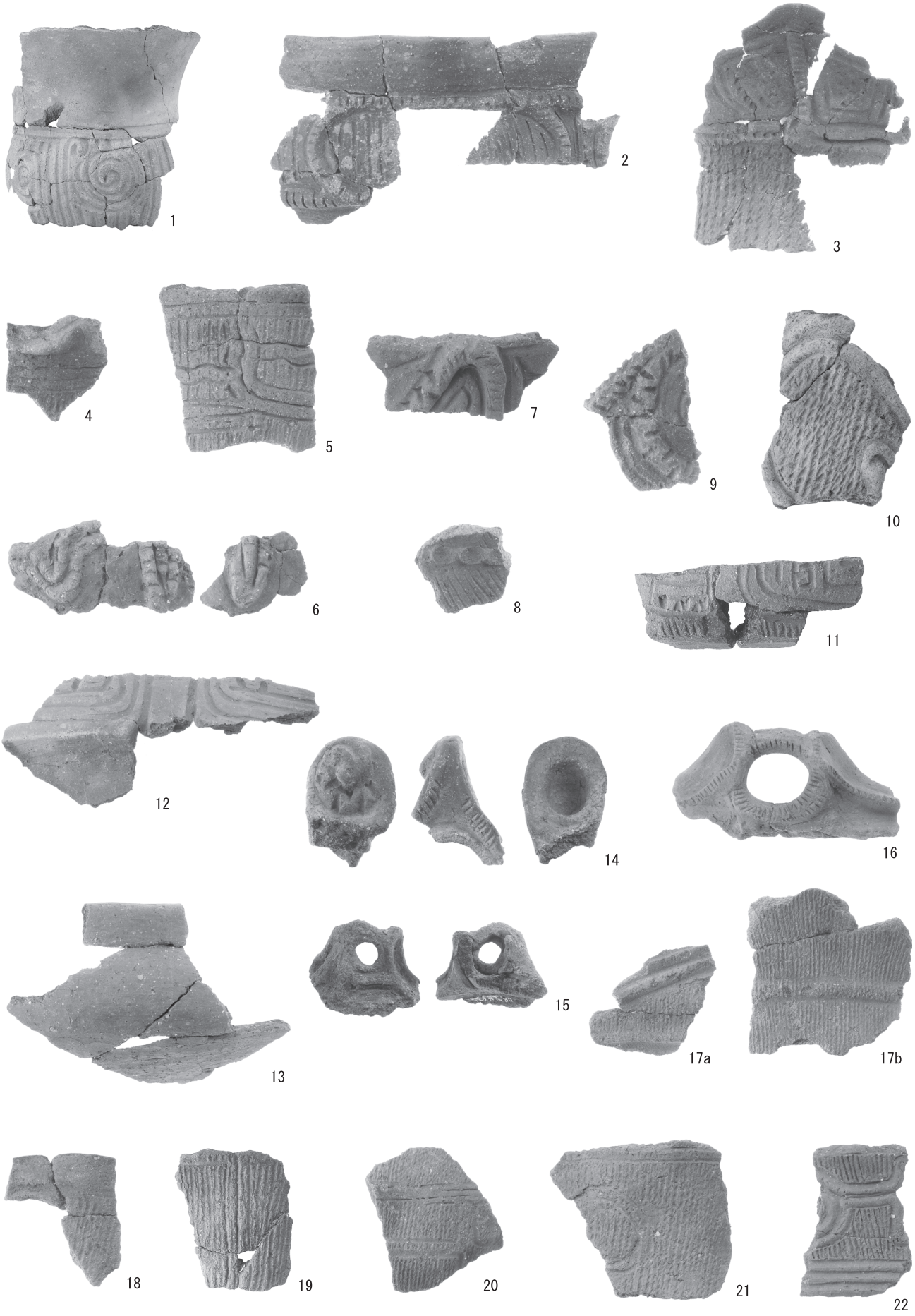
西ノ原遺跡第119地点　163号住居跡　炉体　検出状況


西ノ原遺跡第119地点　163号住居跡　埋甕　検出状況

西ノ原遺跡第119地点　164号住居跡

西ノ原遺跡第119地点　土坑１

西ノ原遺跡第119地点（２） 出土遺物①



23

24

25

26

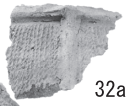
27

28

29

30

31


32a

32b

33

34

35

36
炉体

37（表）

埋甕

37（裏）

西ノ原遺跡第119地点（４） 出土遺物③

38

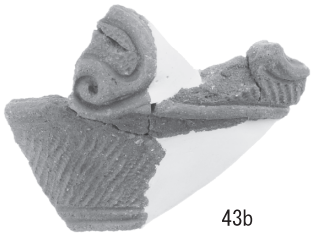
39

40

41

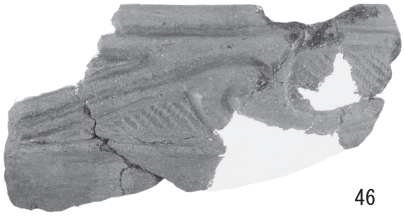
42

43a


43b

44a

44b


46

47

48

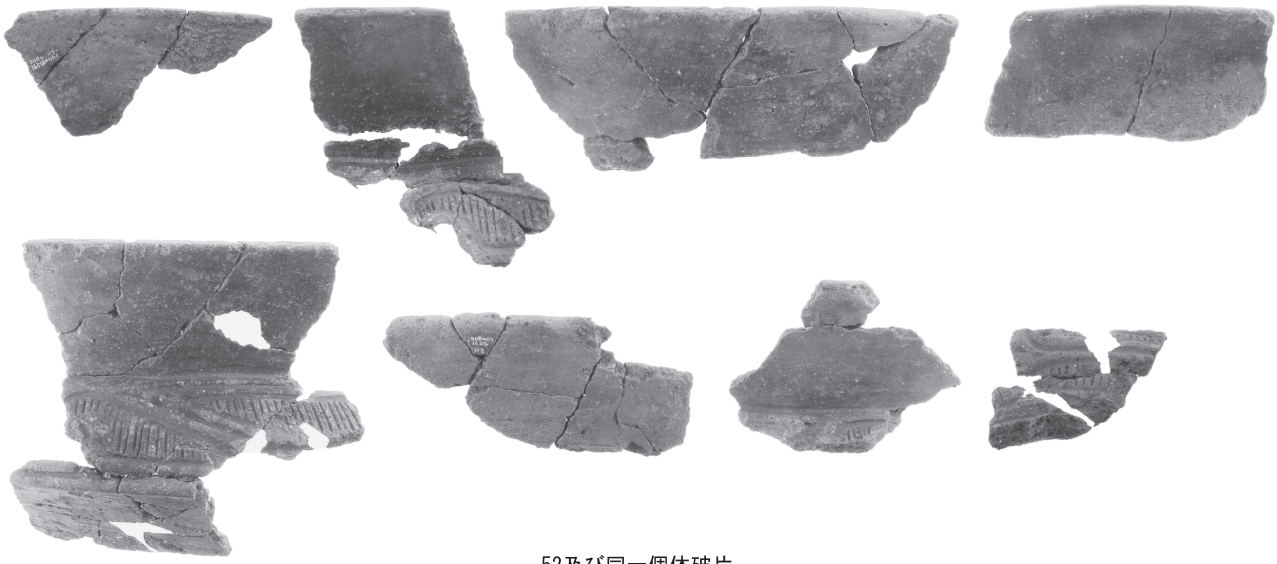
45

49

50

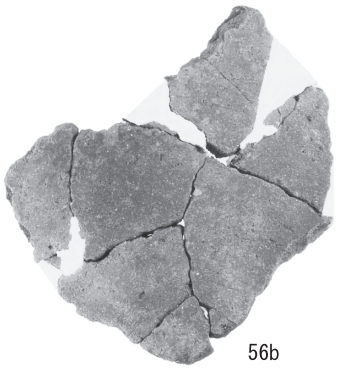
51

52


52及び同一個体破片

54

56a


56b

55

57

58

59

60

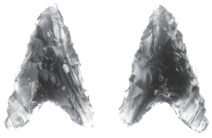
61

62

63

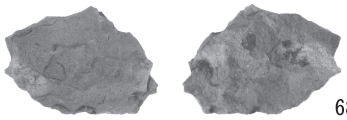
64

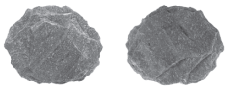
西ノ原遺跡第119地点（６） 出土遺物⑤


65

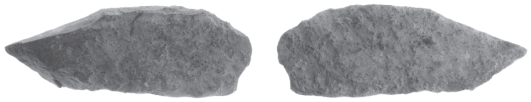
66

67


68

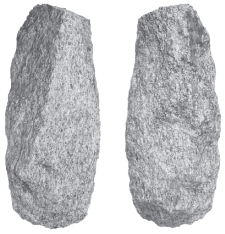

69

70


71

72

73

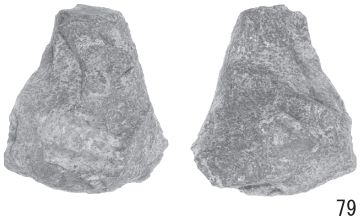

74

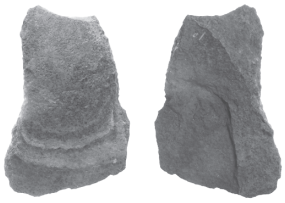
75

76

77

78


79


80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

98

100

101

97

99

102